平成 20 年度
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科　修士論文

高校運動部員の道徳判断と対人関係発達の関連について

スポーツ科学領域
コーチング専門分野
五十嵐　辰也

論文指導教員　中島　宣行　教授

合格年月日　平成21年3月2日

論文審査員　主査 中島宣行

副査 田中純夫

副査 久保田 [illegible]

第1章　緒言 1
第2章　関連文献の考証 4
第1節　道徳性研究の変遷 4
第2節　Kohlberg の道徳性発達理論 6
(1) Kohlberg の道徳性発達理論の概念 6
(2) Kohlberg の道徳性発達理論の検証研究 9
(3) Kohlberg の道徳性発達理論への批判 11
(4) Kohlberg の道徳性発達理論を用いたスポーツ競技者対象の先行研究 12
第3節　対人関係発達 13
(1) 対人関係発達の概念 13
(2) 親との依存－独立の葛藤 14
(3) 心理的離乳 15
(4) 重要な他者 16
(5) 青年期におけるアイデンティティの確立 18
第4節　社会的勢力 21
(1) 社会的勢力の概念と先行研究 21
(2) スポーツ場面における社会的勢力 22
第5節　学校運動部活動 23
第6節　先行研究のまとめと本研究の必要性 24
第3章　目的 27
第4章　研究方法 28
第1節　研究1 28
(1) 目的 28
(2) 方法 28
(3) 分析 30
第2節　研究2 36
(1) 目的 36
(2) 方法 36
(3) 基本的属性における道徳判断 38
(4) 道徳判断と対人関係発達の関連 38

(5) 指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響 39
第5章　結果 40
第1節　基本的属性における道徳判断 40
(1) 高校運動部員の道徳判断の段階 40
(2) 基本的属性における道徳判断得点DP値の得点比較 40
第2節　道徳判断と対人関係発達の関連 42
第3節　指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響 45
(1) 重要な他者を監督とした高校運動部員 45
(2) 重要な他者を部活の友人とした高校運動部員 47
第6章　考察 48
第1節　道徳判断得点DP値の比較 48
(1) 高校運動部員の道徳判断の段階 48
(2) 基本的属性における道徳判断得点DP値の得点比較 49
第2節　道徳判断と対人関係発達の関連 51
第3節　指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響 57
(1) 重要な他者を監督とした高校運動部員 57
(2) 重要な他者を部活の友人とした高校運動部員 58
第4節　全体的考察 59
第7章　今後の課題 60
第8章　結論 61
第9章　要約 62
謝辞
参考及び引用文献
Summray
資料

第1章　緒言

近年、我が国の教育において、「生きる力」の育成が重要な課題とされ、その核となる豊かな人間性の育成を担う柱として、道徳教育の充実が従来にも増して強く求められている[78]。

道徳教育は、1958年に「道徳」の時間として授業科目に特設されるよりも以前から、教育の中枢を担っていたものであり[7]、現在も教育問題として道徳性の低下は必ず議論に上る話題の一つである。我が国では、古くから道徳性の発達を促すものとして、「道徳」という科目だけではなく、スポーツ活動による効果が示唆され、特に学校教育の一環である運動部活動への期待は変わらず続いている。スポーツ活動の教育的側面を認識するようになったきっかけは、19世紀イギリスのパブリック・スクールが、道徳性の発達を促すものとして学校スポーツを掲げ、「スポーツは人格を形成し、道徳的にみて価値がある」[40]という理念に基づき、活動を行ってきたことが挙げられる。このように、世界的に、またわが国でも古くから学校スポーツ活動は人格を育む場として期待され続けている。

道徳性の研究の先駆者であるKohlberg[55]は、児童期後期から青年期の被験者たちにいくつかの道徳的ジレンマ場面を示し、それらに対する彼らの応答の分析を通して、3 レベル（前慣習的・慣習的・後慣習的）6 段階からなる道徳性発達段階を設定した。ここでKohlberg[55]が対象としている道徳性は、その人の価値の決定の仕方や道徳的規範、価値の捉え方である道徳判断であり、道徳判断の発達は認知構造の質的変化であるとした。また、Power[116]はその道徳判断の発達を促すものとして、役割取得の機会、道徳的認知的葛藤、公正な道徳的環境の3つの要因を挙げた。

そこで、本研究ではKohlbergの道徳性発達理論を用い、学校教育の中のスポーツ活動である運動部活動に参加する生徒の道徳判断の発達に注目した。しかしながら、Kohlbergの道徳性発達理論を用いて、学校スポーツ活動参加者を対象に調査した先行研究では、スポーツ活動不参加者の方が参加者に比べ、道徳判断の発達段階が高いステージにあったとする報告[8][13][109]が多数あり、結果としてスポーツ活動の行動的側面は道徳判断の発達には影響を与えないと述べられている。これらの研究結果を考慮すると、スポーツ活動参加者の道徳判断の発達に影響を与えているのはスポーツ活動自体ではなく、スポーツ活動の中にある何か他の要因が彼らの道徳判断に影響を与え、その獲得の有無がスポーツ活動参加者の道徳判断の発達段階の水準を決定付けているのではないかと推測できる。

そこで、スポーツ活動参加者が最も影響を受ける要因の一つとして、その集団の指導者が挙げられる。Telama[40]が、「体育によってどのような効果が生じるかという問題は、体育がどのように組織化されていて、そこで指導者がどのような教育方法を用いているかによって規定される。」と述べているように、集団に対する指導者の働きかけはスポーツ活動参加者の変容にとって非常に重要な作用因となる。山岸[146]によると、Kohlberg は道徳判断の発達にとって、家庭での親子関係やその個人が属する集団が、公正な道徳的環境であることが重要な要因であると述べているとされるが、船木[30]はそれ以上に、仲間集団への参加による役割取得能力の獲得や認知的葛藤場面での経験の充実を図るには、その集団を統率、指揮する指導者である教師の役割が重要であり、仲間との相互作用だけでなく教師の働きかけが子どもたちの道徳判断の発達を促す大きな要因であるとしている。つまり、道徳判断はこの時期の生徒にとって重要な他者である教師、友人の助言やモデリングを通して形成するものであると考えられる。

しかし、Erikson[17]によると、本研究が対象とする学校運動部活動に参加する生徒が、教師や友人との関係を成熟させるためには、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の前提条件である、親との依存ー独立の葛藤(心理的離乳[27])の克服が重大な課題となってくるとしている。なぜなら、杉村[131][133]が述べているようにアイデンティティの形成にとって、他者との関係の中での個人の在り方を模索することは重要な要素であるのだが、それには幼少期の重要な他者である親との依存ー独立の葛藤を適切に果たしてからでないと、社会との関わりに充分にコミットメントできず、アイデンティティの形成も困難になってしまうからである。つまり、青年期において重要な他者である親との依存ー独立の葛藤を克服することが、社会や仲間集団へコミットメントすることに繋がり、またそれが道徳判断の発達やアイデンティティの確立に重要な要因となると考えられる。そして、こうした双方の発達を促す要因を踏まえて、高校運動部員の道徳判断の発達段階をみている研究は皆無であり、人格形成の場として学校運動部活動が認知されている以上、非常に重要な視点であると考える。

したがって本研究は、青年期におけるアイデンティティの確立の前提条件となる親との心的葛藤状態を把握し、親に代わる重要な他者の存在として友人だけでなく、運動部員にとって特有の存在である指導者も加え、このような一連の対人関係発達と運動部員の道徳判断の発達段階との関連について明らかにするものである。また、スポーツにおける指導者と選手のように特別な影響を与える相互関係においては、指導者の持つ社会的勢力[84]に

よって、選手の受ける影響が異なってくるため、選手の道徳判断と指導者の持つ社会的勢力との関連も含めて明らかにする。本研究によって、学校教育における運動部活動での指導者のあり方を見つめ直し、青年期の選手を抱える指導者への現状把握の一助としたい。

第2章　関連文献の考証

第1節　道徳性研究の変遷

道徳性について中島[94]は、「社会一般に受け入れられている規範や慣習を尊重する意識」や「正義や公正さ」といった観点から、「思いやりや配慮」など対人関係を重視する観点、また「道徳的問題を解決する能力」といったものを挙げている。他にも粟田[6]が、社会規範に適応した外的な道徳と定義し、また Kant[48]は自己の内面に適応した内的な道徳と定義しており、一貫した定義づけは成されていないようである。しかし、こうした全ての定義は道徳性の本質を捉えたものであり、それらの総体を道徳性と呼んでも異論はないと考える。

道徳性研究は、1896 年に Freud が精神分析理論により、超自我における同一視とエディプスコンプレックスという視点から道徳性の形成が進むこと[18][58][129]を示唆したことから端を発した。そして、Freud の理論がきっかけとなり、人類学者や心理学者、社会学者が挙って「社会化」という形で研究を進めていく中、1932 年にスイスの心理学者 Piaget が、『児童の道徳判断』を刊行し、他律的道徳性から自律的道徳性への発達段階が存在することを報告した[18][154]。Evans[18]によると、Piaget の道徳性の発達は、Freud の道徳性とは異なり、外部からの統制や外部の基準によって束縛されない、比較的自由な内的な道徳性であるという。そして Piaget は、その後の研究では社会的な事象についての知識獲得より科学的事象についての知識獲得である認知的発達理論へと焦点を移していった。

吉岡[154]によると Piaget 以降、道徳性の研究は、「品性としての道徳性は一貫した特性ではなく、状況に依存し、変動する特性である」とする Hartshorne らの研究により、急激に廃れていったが、状況からの作用原理を行動主義的な学習理論や社会的学習理論から究明する活動により、隆盛されてきた。しかし、1960 年代に Piaget の認知的発達理論を受け継いだ Kohlberg の研究によって、道徳性の行動的側面ではなく認知的な側面に関心が向けられるようになってきた。山岸[149]によると Kohlberg の提唱した道徳性発達理論は Piaget の認知的発達理論の社会的領域への拡張であり、役割取得理論を提唱した Mead らの理論や Kant、Hare らの形式的哲学を発達的問題として具体化したものと考えられる。そしてこの Kohlberg の理論は道徳性研究に多大な影響を与え、1960 年代から 1980 年代は Kohlberg の理論を中心に展開してきたと言っても過言ではないと Power[116]は述べている。また、岩佐[57]は、Kohlberg が道徳性研究に貢献したこととして、①人間の道徳段階には発達段階が

あり、この発達段階は文化の違いを超えて普遍的な妥当性をもつということを明らかにしたこと、②発達段階に基づく道徳教育の在り方について体系的な理論を提出するとともに、それを実際の教育現場で精力的に展開していること、③この学問的立場の第一人者として、多くの学者を育て、研究者の一大組織の形成に寄与したこと、などをあげている。

このようなKohlbergの研究に批判を加えたのが、社会的学習理論を展開したBanduraである。Bandura[134]は攻撃性など他の多くの社会的行動と同様に、道徳性も社会的強化の随伴性モデルの観察（モデリング）という社会環境的な要因によって、社会的に学習されると主張した。道徳性の行動的側面に関しては、Kohlberg[60]自身も、認知と行動の相関を明らかにした研究を行っているが、個人差要因をコントロールすると関係性が消失してしまうというRushton[122]の報告や、Kohlbergの道徳性発達段階は社会学習経験により容易に変化すること、また道徳性は段階的に発達するのではなく、状況や経験要因により発達していくことを報告した大西[106]の研究があり、論争は平行線のままであった。その後、Eisenberg[96]の向社会的行動などの研究も行われ、道徳性の行動的側面はKohlbergの道徳性研究に次いで重要な地位を占めてきた。また、道徳性を「自分の置かれた状況よりも他人の置かれた状況にふさわしい感情」である、共感性という道徳的感情側面から捉えた、Hoffman[26]の研究も現れ、彼は「共感は直接に、あるいは原理を通じて、道徳的原理を動かし、道徳的判断と推論に影響を与える。」と述べ、共感性が道徳判断を決定づける一つの要因であることを示唆した。実際、Kohlberg[55]により、道徳判断と共感性は、中程度の相関が確認されている。

このように、一口に道徳性と言っても、認知的側面、行動的側面、感情的側面と、様々な捉え方が存在し、それぞれが重要性を示唆している。特に、道徳性の発達を捉えるためには個々の行動や態度ではなく、どのような正しさの枠組みを持ち、状況をどのように捉え、それらを行動決定にどう使うかという、認知・判断を考えることこそ重要だとするKohlbergの理論に対しては、「正しい道徳判断ができるからといって、常に道徳的であるとは限らないのではないか。形式的、知的に判断できるとしても、それが人としての思いやりや、優しさを身に付けたことになるのか。」[4]といった批判や疑問が寄せられている。しかし、Blasi[9]は、「道徳性は究極的には、行為の中に内在し、道徳性の発達の研究は最終的な基準として、行為を取り扱うべきことに異論を唱える人はいないであろう。しかし、また道徳性を客観的な観察可能な行動だけに限定する人もいないであろう。道徳性は、感情、判断、意志決定、行為などの様々な諸過程を含んだ複雑なものである。」と述べている

ように、どの側面からの研究が正しいのかではなく、認知的側面、行動的側面、感情的側面などが相互に影響し合って、道徳性を構成していると考えるのが妥当である。そして近年、この様な視点から道徳性を捉えた Rest[120)121)]により、①状況の解釈、②道徳的行為の計画の立案、③行為の選択、④道徳的行為の実行、という道徳性を構成する四構成要素理論が発表された。これは、道徳性の 3 つの側面を包括したものであるが、4 つの要素を総合的に扱った研究は現在行われておらず、四構成要素理論のどれか一部をあつかった研究しか存在しない。今後は、Rest の提案の有効性も含め、道徳性の発達をより全体的・体系的に捉え、研究していく必要があるだろう。

その他の道徳性研究は、Kohlberg の理論を用いて、Rest[120)121)]が DIT (Defining Issues Test)という測定評価尺度を作成し、従来の道徳判断インタビュー調査をより簡素化した。また、それを山岸[147)]は日本版として作成し、日本における道徳性研究の発展に貢献した。この尺度の作成にあたって、山岸は第 6 段階まである道徳性発達段階について、日本では必ずしもそのまま当てはまらないこと、また Kohlberg 自身の定義にも不明瞭な点があることから、第 5 段階と第 6 段階を合わせて第 5 段階としている。また、近年では荒木ら[3)4)75)]により、Kohlberg の理論を日本の学校の授業でジレンマ教材として実践し、一定の成果を上げている。

第 2 節　Kohlberg の道徳性発達理論

(1) Kohlberg の道徳性発達理論の概念

Kohlberg[55)]の研究は、Piaget の認知的発達理論を道徳性の発達の問題に適用し、これを 3 水準 6 段階から成る、普遍主義的な正義推論に関する厳格な発達段階説として定式化することから出発した。この Kohlberg[55)]の発達段階を成すのは道徳性の判断の形式であり、その人の価値の決定の仕方や道徳的規範、価値の捉え方に着目し、「～はやるべきではない」と考える理由、根拠を分析することによって明らかにされるものである。また道徳判断の発達段階は、環境との相互作用によって、以前の段階の諸要素を分化して新たな段階と統合し、連続的段階的に変化していく、非可逆的な質的変容である[68)153)]。そして、隈元[68)]によると、より分化し統合された道徳的構造は、より多くの道徳問題、葛藤、見解を、より安定した方法で、あるいは自らの内でより一貫した方法で扱うことができるという。

表 1 に Kohrberg[59)]の道徳性発達理論をまとめた。まず、前慣習的水準である。前慣習的水準レベルでは「善い」「悪い」といった個々の文化の中で意味づけられた規則や言葉に反

表1 Kohlbergの道徳性発達理論

<前慣習的水準>	
第1段階 他律的道徳性	罰や制裁を回避し、権威に対し自己中心的に服従
第2段階 個人主義的道具的道徳性	報酬や利益を求め、素朴な利己主義を志向し、自己欲求の満足が善
<慣習的水準>	
第3段階 対人的規範の道徳性	"よい子"よい対人関係への志向。他者からの是認を求め他者に同調する
第4段階 社会システムの道徳性	義務を果たし、与えられた社会秩序を維持することへの志向
<後慣習的水準>	
第5段階 人権と社会福祉の道徳性	平等の維持、契約(自由で平等な個人同士の一致)への志向
第6段階 普遍性、可逆的、指令性をもつ一般的な倫理原則の道徳性	良心と原則への志向。相互の信頼と尊敬への志向

Kohlberg(1984)

応するが、これらの言葉の意味を、行為のもたらす物理的効果や、快・不快の程度(罰、報酬)によって考えたり、そのような規則や言葉を発する人物の物理的な力によって考えたりする。第1段階では、罰や制裁を回避し、権威に対し自己中心的、盲目的に服従することが価値のあることと考えられ、物理的効果が善悪を決める段階であり、第2段階では、自分自身の利益や欲求に合うように行動することが正しいとされ、具体的・相対的・個人主義的視点を持つ。一応、公正、相互性、等しい分け前等の要素は存在するが、人間関係を市場の取引関係に似たものと考えているので、そこに忠誠や感謝や正義という概念はない。次に慣習的水準では、個人の属する家族、集団、あるいは国の期待に添うことが、それだけで価値があると認識され、それがどのような明白な直接的効果をもたらすのかは問われない。つまり、慣習的な秩序や他者からの期待を維持しようとすることに道徳的価値を置いているレベルである。第3段階は、ステレオタイプの「よい」イメージに同調し、他者から期待されるよい役割を遂行することが正しいとする段階であり、第4段階では、社会における義務や責任を果たし、権威を尊敬し、与えられた社会秩序を保つことに価値を置いている。組織の中で自分の行為が他人にどんな影響を与えているか、といった問いかけができる段階である。最後に後慣習的水準では、現実の社会や規範を越えて、妥当性と普遍性をもつ原則に志向し、自己の原則を維持することに道徳的価値を置くレベルである。

第5段階は、一般的な個人の権利と幸福を守るために、社会全体によって吟味され一致したものとしての規準に従うことが正しいことであり、社会契約(自由で平等な個人同士の一致)や全体の効用(最大多数の最大幸福)に志向する。また、生命や自由のような相対的ではない価値や権利は、どのような社会でも、また多数者の意見に関わらず守らなければならないという観点を持つようになる。第6段階は、論理的包括性、普遍性、一貫性に訴えて自ら選択した倫理的原理に一致する良心の決定によって正しさが規定される。これらの原理は、抽象的かつ倫理的であり(黄金律、定言的命法[48])、十戒のような具体的道徳律ではない。もともとこれらの原理は、人間の権利の相互性と平等性、一人ひとりの人間の尊厳性の尊重など、正義の普遍的諸原理である。

以上のような発達段階を経ていくところが Kohlberg の道徳性発達理論の特徴であり、Piaget が認知的発達段階の条件としてあげた、①発達と共に質的変化をとげる、②状況によらず一つの一貫した構造をなしている、③段階の出現には普遍的な順序性がある、④発達段階は階層をなしていて、ある段階は前段階が分化し統合したもの、を満たすものであると山岸[150]は述べている。しかし、大西[107]によると Kohlberg が行った縦断的研究において、16歳のときに第4段階を示した被験者の $^1/_5$ が、4年後の20歳のときの再検査では第2段階へ退行し、24歳のときの再検査では、また第4段階、または第5段階へと発達するという、従来の Kohlberg の道徳性発達理論では解釈できない結果が確認された。この現象を解釈するために、Kohlberg は、第4段階の移行期として第 $4^1/_2$ 段階の移行段階を仮定した。それは、16歳時の第4段階が20歳時には自己の道徳的志向をひそかに放棄し、一時的に退行し、24歳時には、信じている集団や権威体系について歪みのない理想主義と、その体系から逸脱する者やその体系外の者へのより大きな耐性や現実主義を具備した、より高次な水準での自我統合によりなされていると解釈した。また、この一時的な退行は、統合のための必要条件となると解釈され、この現象を慣習的道徳的価値の拒否と原理的道徳の受容をめぐって動揺する過渡期的現象と考え、Erikson[17]の同一性の危機や、モラトリアムと対応するものとして解釈している。

では、こうした Kohlberg の道徳判断を発達させるには、どのような要因が関係しているのだろうか。Power[116]は、道徳判断が発達する要因として、役割取得が求められる様々な経験の場を与えること(役割取得の機会)、道徳的認知的葛藤を生じさせること、公正な道徳的環境を与えること、の3つの要因をあげている。山岸[148]によると、役割取得(role-taking)とは、自他の視点を分化し、他者の視点に立つことで、他者の認知を推論す

る能力のことであり、相手の立場になって物事を考える視点のことである。Kohlberg[58]は、役割取得をするための第一の必要条件は、コミュニケーションが促されるグループや制度への参加であると述べている。さらに、グループの決定に責任ある立場にあり、その行為がグループに及ぼす影響が大きいほど、役割取得の機会は高まるという。二つ目の道徳的認知的葛藤は、自分の持っている認知構造では解決できずに、他者の意見や状況と葛藤している状態のことであり、Kohlberg[58]によれば、発達を促す直接的な要因は、この認知的葛藤を与えることであるという。なぜなら、人は不均衡が引き起こされた時、より高い水準で葛藤を解決し、均衡化しようとする志向を持つため、自分の要求と他者の要求とを公正に解決しようとすることで、役割取得能力の取得の機会も促進されるからである。三つ目の公正な道徳的環境とは、山岸[149]によるとその個人が属する集団がどのように機能し、メンバーをいかに公正に扱っているかという、集団の質のことであり、Higgins ら[24]は、集団の持つ性質が道徳的行動や判断を規定する要因であるとしている。また、これらの道徳判断を直接的に発達させる3つの要因のほかに、Kohlberg[56]は被験者自身のレベルより、一段上の道徳判断が最大の同化を引き起こすことを挙げており、その過程を、山岸[150]は、「認知的葛藤→葛藤解決への努力→より高いレベルの考え方に触れる→均衡化」というように表している。

(2) Kohlberg の道徳性発達理論の検証研究

Kohlberg の道徳性発達理論は、多様な理論基盤を持つ研究者に吟味され、研究されてきた。そして、多くの研究により、年齢と共に発達段階が上がることや、発達段階の順序性、文化間においての普遍性、そして客観性ないし信頼性があることが報告されている[90)145)146)150)153)]。そして性差に関しても、階層、教育、職業が同じなら男女差はないという結果が出ている[57)145)]。また、道徳的行動との関連も検討されていて、Kohlberg の段階評定法を用いたほとんどの研究において、比較的高次の道徳判断と、一般に道徳的行動と呼ばれてきたものとの間に相関関係があることが報告されている[60)61)]。

環境的な要因に関する研究では、家庭要因に関して、Hoffman[26]は、結果誘導的な方法(子どもの行動が他者に与える結果と責任を指摘する)が子どもの道徳判断の発達段階と正の相関、権力ー強制的な方法(罰や脅しを使用)が負の相関を持つことを報告し、Holstein[28]は、親と子の道徳判断レベルの関係は父親とは相関がみられないが、母親とは相関があり、原則的水準の母親の子どもは前慣習的水準が少ないという報告をしている。仲間集団に関

しては、Kolberg[56]が、集団への参加が多いキブツ(イスラエル共和国の農業共同体)の子の方が、それが少ないアメリカの孤児院の子より、有意に道徳判断の発達段階が高いという報告を行っている。また、Keasey[51]は、所属しているクラブの数、リーダーシップ、人気などに関し、教師や仲間からの評定も含め、社会的参加が多い者の方が道徳判断の発達段階が有意に高かったと報告している。仲間集団の代表的なものとしてあげられる学校集団に関しても、Proios ら[117]により、メンバー間で、相互に思いやりをもち、公平にものごとが決定されている集団と、各自が自分の利益のみを考えている集団とでは、道徳的行動や道徳性の発達に対して異なる影響があるとされ、Reimer[119]は、特定の道徳判断の発達段階に生徒が集中すると、それが道徳的雰囲気を決定すると報告しているため、クラスでの道徳的雰囲気はそこに所属する生徒たちと相互に影響し合うことが示唆される。また、学校における集団生活や集団規範がもつ道徳的形成力は、1960 年代後半から、「隠れたカリキュラム」(hidden or latent curriculum) として知られてきたものであり、Kohlberg[57]はこれを道徳教育として実践している。

以上の先行研究から、家庭や学校が子どもの道徳判断の発達に非常に強い影響を与えていると考えられるが、Kohlberg[58]は家庭や仲間集団との相互作用だけではなく、教師の役割の重要性を示唆している。限元[67]は道徳判断の発達を促す教師の役割を次のようにまとめた。①葛藤を見出し、その葛藤について集中して考えることを助ける。②熟考する際に推論の構成を助ける。③推論の一貫性とその適・不適について子供自身が批判的に反省できるように仕向ける。④より整合的・効果的な推論や解決法を示唆する。実際、道徳判断の発達は、教師によりなされた道徳的な誠実性に関する評定との間に.46 の相関があるという結果が Kohlberg[57]により報告されていることから、家庭はともかく、仲間集団との相互作用をより意味のあるものとするためには、教師の働きかけが大きな役割を担っている可能性が示唆される。

このように先行研究をレビューしてみると、一つ重要な研究がなされていない。それは道徳判断の発達には具体的に、何がどのくらい影響しているのかということである。家庭や仲間集団、教師の与える影響の強さは明らかになっても、具体的にどのような関わりが子ども達の道徳判断の発達を直接的に促しているのかという心理学的な研究は行われていない。つまり、道徳判断を直接的に発達させる、役割取得の機会、認知的葛藤場面への参加、公正な場の雰囲気、といった 3 つの要因を用いた研究は皆無である。しかし、これは 3 つの要因が非常に抽象的で、測定しにくいものであるということに尽きるのではないだ

ろうか。そのため、道徳判断を直接的に発達させる3つの要因を検討するのではなく、これら3つの要因を促すような他の要因を検討することが、現在可能な道徳判断に関する研究方法であると考えられる。

(3) Kohlbergの道徳性発達理論への批判

Kohlbergの道徳性発達理論は、今日までに様々な角度から批判されてきた。その代表的なものをいくつか挙げていく。

まず、人類学者で文化相対主義者であるShwederは、Kohlbergが、人間のもつ道徳のコードが言語や食物のように多様であり、しかも等価であるという考え方を嫌っていることを指摘し、彼のリベラルで普遍的な道徳哲学を批判した[61)68)]。また、Simpsonは、「Kohlbergのいう発達段階が文化的にみて普遍的である必要はないし、また実際に普遍的ではない。」と批判した[61)]。Sullivanは、第6段階の推論に関するKohlbergの考え方は、啓蒙主義にその起源をもつことからもみても、普遍的にあてはまる「道徳人」のモデルではなく、特定の立場をとる偏ったモデルにすぎないという[61)]。これらの批判は、Kohlberg理論の社会・歴史的な背景が適切に指摘されているものもあれば、そうでないものもあり、Kohlbergはそれぞれに適確な回答を示している。その中で最もKohlbergの理論に影響を与えた人物の批判として、Kohlbergの弟子にあたるGilliganの批判があげられる。

Gilligan[22)]によると、パーソナリティ発達に関する主要な理論のほとんどが男性によって作られてきたために、これらの理論は女性のパーソナリティ発達よりも、男性のパーソナリティ発達に関する考察や認識を色濃く反映しているという。そして、Kohlberg的な道徳観を「男性の道徳」とし、これに対して、行為主体が現実に切り結んでいる人間関係や、他者への責任・ケアに道徳性の基礎を置く「女性の道徳」を対置させたのである。隈元[68)]によると、KohlbergもGilliganのこの批判を深刻に受け止めるが、Kohlbergの立場からは、Gilliganの批判をそのまま受容することは不可能であったという。なぜなら、Gilliganの立場は、経験的脈絡の個別性や特殊性に応じた道徳的思考、つまり倫理的相対主義に帰着するものである以上、Kohlbergの志向する倫理的普遍主義と両立しないからである。そこで、実際に性差の有無をみたRest[121)]のレビューをみてみると、先行研究で紹介したものと同様に、性差は見出されなかった。このようにKohlbergはGilliganの批判を退けたのだが、一方でGilliganの指摘を受け入れて道徳的領域を広げて考えるようになり、形式主義や普遍主義に偏った道徳性理解や発達段階説の限界を部分的に認め、他者へのケアや愛、

共同体意識なども道徳性の要因とした。そしてこれらは、矛盾するものではなく、相互補完的であると考えたのである[58)68)]。ただし、Kohlbergの真意としては、普遍主義的な正義の倫理と特殊主義的なケアの倫理とを単純に接合するということではなく、正義の原理を拡張して、そこに他者一般の幸福を志向する仁愛の原理を含めることであったと、隈元[68)]は述べている。

他にも様々な批判があるが、小柳[65)]が「道徳教育を観念的恣意的なものから、心理学的哲学的に統合し、合理的普遍的なものへと、構築しようとしたKohlbergの理論の意義は薄れるものではない」と述べているように、Kohlberg理論が道徳性研究に果たした役割は非常に大きなものである。

(4) Kohlbergの道徳性発達理論を用いたスポーツ競技者対象の先行研究

Kohlbergの道徳性発達理論を用い、スポーツ競技者の道徳判断を検討した研究は欧米でいくつか行われている。ほとんどが学生アスリートを対象に行われているものであるが、ここで一貫して報告されていることは、学生アスリートは一般の学生よりも、道徳判断の得点が有意に低かったという結果である[8)13)109)117)128)]。しかし、Lumpkin[69)]は、このような結果に対して、「勝つことが主な目的になってしまう一部の学生アスリートが、得る可能性のあった規範や道徳性を失うことになってしまった」と指摘している。また、Bellerと Stoll[8)]が、「私がグランドでプレーするとき経験していた問題は、いつも私に道徳性を教え、強化してくれたことを遠慮することなしに宣言する。」と述べているように、従来からスポーツ活動における道徳性の育成は期待され続けているものであるため、一概に先行研究のような結果を支持することはできない。

では、なぜこのように研究結果と経験則の双方に食い違いが生じるのだろうか。Bredemeier と Shields[14)]が「スポーツは実社会で与えられるような多くの道徳的ジレンマで構成されている」と述べていることからも、スポーツ活動には、道徳性の発達を促す機会は多く含まれていることは間違いなさそうである。したがって、Lumpkin の指摘のように、先行研究で対象となった学生アスリートは、スポーツ活動における何らかの要因によって、本来得ることのできるはずであった、道徳判断の発達を促す機会を逃してしまった可能性は大きい。つまり、Bredemeier と Shields[13)]の「スポーツ経験自体は道徳判断の発達に寄与しない」という報告からも推測できるように、学生アスリートの道徳判断が一般の学生より低かったという結果は、スポーツ活動参加者共通の結果ではなく、スポーツ活

動を通して得ることのできる道徳判断の発達を促す機会をどれだけ消化することができるかを決定付ける他の要因の存在が結果を左右したと考えられる。そこで、スポーツ活動において、学生アスリートの道徳判断の発達を促す要因の内、最も重要な要因として、そのスポーツ集団を率いる指導者や教師を挙げることができるであろう。

スポーツ集団の中の指導者や教師の与える影響の大きさは様々な研究[8)40)84)]でも報告されている。また、Kohlberg[58)]も集団における教師の役割の重要性を示唆している。つまり、スポーツ活動で得ることのできる道徳的ジレンマを道徳判断の発達に生かせるかどうかは、その集団の指導者や教師にかかっていると考えられる。しかし、スポーツ集団の指導者や教師を、道徳判断の発達を促す要因として調査した研究は散見される程度であり、ほとんどが競技経験年数や競技別の道徳判断の差異を問題とした研究である。ちなみに、競技経験年数は道徳判断の発達に寄与していないという報告[13)]や、チームスポーツは個人スポーツより道徳判断の発達が低いという報告[14)]がされている。スポーツが人格形成を促す活動であるという前提に立つならば、基本的属性による道徳判断の差異を扱うだけではなく、その道徳判断の発達の違いを生み出した要因を明らかにしていくことも、教育現場の教師やスポーツ活動の指導者に有用な資料を提供することになるのではないだろうか。

第3節　対人関係発達

(1) 対人関係発達の概念

対人関係発達とは、青年期における親との依存－独立の葛藤の末、心理的な独立、つまり心理的離乳[26)]を果たし、親以外の重要な他者との信頼感を高め、適切な関係を構築していくプロセスであり、Erikson[17)]が提唱した漸成的自我発達理論における青年期の発達課題の一つである、「アイデンティティの確立」にも対応している、一連の対人関係における発達の総称である。(図1) 現在、対人関係発達を順序的に検討した先行研究は見当たらないが、親との依存－独立の葛藤、心理的離乳、親以外の重要な他者、アイデンティティの確立、各々をみた研究は行われている。

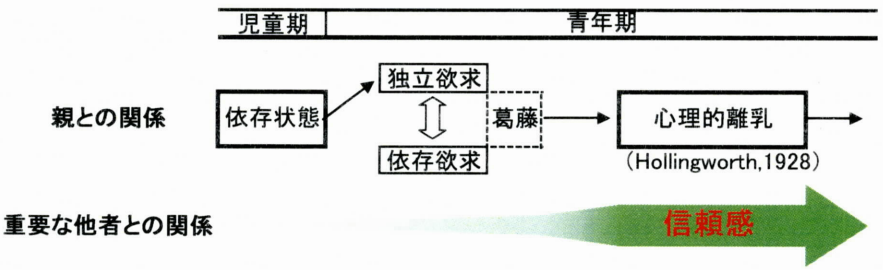

図1　親との依存－独立の葛藤をめぐる対人関係発達過程(井上,1995[38)]を一部改良)

(2) 親との依存ー独立の葛藤

親との依存ー独立の葛藤は青年期におこる発達過程の一部であり、小島[63]は、依存欲求を「生活上の具体的な支えではなく、慰め・是認・注意・保証・心の支えなどの肯定的な顧慮・反応を親に対して求める欲求」とし、独立欲求は、「親の考え・価値観に左右されない、自己の独自性を保とうとする欲求」と定義している。

村瀬[87]が述べている発生プロセスを概観すると、児童期までは、親に依存した安定した親子関係が継続するが、青年期前期に入ると、急激な身体的成長と第二次性徴による生物学的変化によって、自己と身体の一体性が失われ、また自分の身体に向けられる他者のまなざしが気になり始めるために、注意が自分自身に向かわざるをえなくなる。同時に、性衝動が高まり、異性がはっきりと意識されるようになると、それまでのような親への依存（特に男子の母親への依存）が困難になる。この第二次性徴の発現を契機として、青年は親への依存から独立し、幼児的対象から情緒的に離脱することによって、大人社会への仲間入りをする。しかし、西平[99]によると、実際は両親の側の甘やかしが残存することと相まって、青年自身の内面において、むしろこの時期に依存、甘えの要求が強まる事実があり、無意識に両親からの離脱を恐れ（分離不安の変形）、依存を強めたいと願っているという。つまり、井上[38]が述べているように、幼児的な依存、誇大感、安全性、満足といったものへの力強い退行的な引き戻しから逃れることが、この時期に必要とされる課題なのである。

上記のように、青年期に突入する時期に、親からの独立欲求の萌芽と同時に依存欲求も高まり、その間で強い葛藤を引き起こすことになる。この依存欲求と独立欲求の葛藤を心理的に適切に処理することにより、親子関係の再構造化が図られ、独立し安定した個の確立が進行すると考えられる。このような葛藤の重要性は、福島[29]が臨床的な知見からも認識しており、葛藤の行動的表現の一つである反抗は、青年の自我の成熟にとって必要な条件であるとしているが、森[82]はこの葛藤によって青年期危機を招いて非行や神経症に至る恐れがあるという報告を行っている。

依存欲求と独立欲求についての先行研究はそれほど多くはなく、親子関係の中で扱われてきたというより、親は対象の一つとして捉えられてきた[136][137][138]。そのために、ある個人が様々な対象に様々な形でもつ依存欲求を総称して依存性という概念が用いられてきた。一方、独立欲求の研究は、加藤と高木[50]や井上[37][38][39]の研究により進められてきた。加藤と高木[50]は、両親に対して、女子が男子よりも依存欲求が高く、独立欲求が低かったと報

告し、Marcia[70]の提唱した自我同一性地位の類型化と親との依存欲求、親からの独立欲求との関係をみた井上[37]の研究では、同一性達成地位にある青年は2つの欲求のバランスがとれているのに対し、同一性拡散地位にある者は依存欲求が弱く、独立欲求が強いため、同一性の探究に心的エネルギーを傾けることができなくなっていると報告している。ちなみに、スポーツ選手における親との心的葛藤に焦点を当てた研究はなく、一般の人との比較、検討は行われていない。

以上のことから、井上[37]が「青年期において、親との依存ー独立の葛藤をめぐる問題をどのように処理しているのか、それが青年の同一性の形成に影響を及ぼし、ひいては現実生活での適応にまで波及する。」と述べているように、青年期においての親子関係は転換期を迎える時期であり、親との葛藤経験は非常に重要な発達過程であると言える。

(3) 心理的離乳

上記のような青年期における親子関係の変化、つまり 12 歳から 20 歳の間の、「青年が親の監督から離れて独立した人間になろうとする強い衝動が生じる過程」を、Hollingworth[27]は、心理的離乳と定義した。そして、西平[99]は「児童が青年となり、青年が成人になり、さらに自己実現を果たすために必要な心理的な発達過程」と心理的離乳を捉え、自我を確立していく過程も概念に含んだ定義づけを行った。また、この様な過程をAusubel[5]は、脱衛星化という概念を用いて説明し、Blos[10]はMahlerの指摘した幼児期の母子関係における分離個体化と対比させて、青年期のこうした過程を第二の個体化過程と呼んだ。

西平[99]は、青年期の心理的離乳に関して、従来から指摘されている思春期の心理的離乳を「第1次心理的離乳」とし、青年期後期に「第2次心理的離乳」の時期が訪れるとしている。前者は「親からの離脱、依存性の払拭に重点をおくもの」であるのに対し、後者は「離乳後に育つべき自律性に重点を移したもの」とし、「この第 2 次心理的離乳は、第 1 次の諸特質を引き続きながら、次第に自立、独立の方向に重点を移し、より客観的、自覚的になり、一対一の人間関係として両親との絆を再び強めさえする。」と述べている。この心理的離乳の分離は、客観的には、青年をとりまく社会、つまり歴史的状況が複雑多様化し、家族形態や親子関係の意味も内容も移り変わり、青年期が引き延ばされ、情報量が激増し、また青年自身の主観的条件としては、人生に対する不信感が増し、不安が潜在化し、人格形成の未熟さなどが醸し出した、一つの世代的特質によるものであると解釈できると

いう。また、西平[98]は、「親に代わる心理的投錨地、すなわち仲間や異性との関係を形成し、親に対する代償的存在（教師、叔父など）によって心理的離乳が促される」と述べ、心理的離乳と親以外の重要な他者との相互作用を示唆している。

落合[110)111)112)]によると、Hollingworth 以降、青年期の心理的離乳に関する実証的研究はほとんど行われてこなかったが、近年徐々にその実態や様相が明らかにされてきた。落合[110)111)]は、心理的離乳の発達過程を 5 段階で表して、心理的離乳における親子関係の特徴を明らかにし、心理的離乳を適切に処理できるかどうかが、その個人の人間不信感にも繋がってくると報告した。また、心理的離乳の学年差を中学・高校・大学の 10 学年を通して分析した松井ら[73)]の研究では、高校生の時期が第一次心理的離乳から第二次心理的離乳の発達課題への移行期にあたるという結果を報告している。他にも、対人間心理的距離との関連をみた金原[46)]の研究では、友人と親密な関係が築かれている生徒ほど、母親と適度に心理的距離がとれていること、母親が自分と手を切ろうとしていると感じている生徒ほど、友人と親密な関係が築かれていないという結果が報告されている。また、女性の依存心や独立心を研究した三田[76)]は、青年期における心理的離乳について、男子より女子の方が難しく、アンビバレントな葛藤が強く、その解決は容易ではないことを指摘している。

この心理的離乳も親との心的葛藤の研究と同じく、スポーツ選手を対象とした研究は行われておらず、幼い頃からスポーツ活動を熱心に行ってきた子どもの心理的離乳の過程が一般の子どもと異なるのかどうかは興味が持たれるところである。

(4) 重要な他者

落合[113)]は、「青年期は心理的離乳の途上にあり、親との関係は児童期のように密着したものではなくなってくる。そのため、青年が頼りにする相手や、心を打ち明ける相手は、しだいに親以外の重要な他者になってくる。」と述べている。金子[47)]によると、心理臨床における重要な他者の概念は、クライエントにとっての母親、父親、きょうだい、友人、配偶者、こどもなど、心理的に深い関わりをもつ他者を意味する用語として使用されるが、永田[89)]が「他者との関係にはさまざまな文脈が考えられるが、特に重要な他者との関係は人間生活の生物学的、情緒的な側面において個人に与える影響が大きく重要である」と述べ、また杉村[132)]も「両親・友人・恋人といった他者との関係性は、アイデンティティを形成するための不可欠な“土壌”として存在する」と述べているように、近年のアイデンティティ研究における、重要な他者が与える影響の大きさが注目されている。

重要な他者に関する先行研究は、親子関係に焦点を絞ったものが多いが、井上と高橋[36]は「急速な時代の変化に伴い、家族の在り方そのものが揺らいでいる現代においては、母子関係といったある特定の文脈のみではなく、複数の重要な他者との関係でとらえるという視点は非常に有効である」と述べており、酒井ら[124]も、親以外の重要な他者との関係を検討することの重要性を示唆している。そして、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の過程においても、親以外の重要な他者との相互関係は非常に重要な要因であり、永田[89]によると、Erikson もアイデンティティの形成における他者との関係性(重要な他者との相互作用及び継続的な積極的な関与[53])の役割を重視しているという。そして、Kroger[66]の研究においても、重要な他者との関係はアイデンティティ発達に深い関わりをもつことは立証されている。例えば、岡田と永井[102]は大学一年生を対象にし、心を打ち明ける重要な他者がいない青年期の一群では、対人恐怖傾向や自我同一性の低さがみられることを示し、Josselson[45]は、アイデンティティ形成における他者の役割を総合的な観点から検討した結果、アイデンティティが関係性の中から現れること、それゆえにアイデンティティの形成においては、他者との豊かな結びつきを維持する個人の能力が問われることを示唆している。つまり、金[53]が「人とつながりつつの自己実現」と述べていることからもわかるように、青年期において重要な他者との関わりはアイデンティティの形成に必要不可欠なのである。

また、重要な他者との関係を子どものメンタルヘルスの視点からみた研究も、天貝[2]により行われており、東京都子ども基本調査報告書[143]も、重要な他者との信頼関係は、思春期の精神的なストレスを低減し、情緒的な充足感をもたらすことを指摘している。また、Cooper と Shaver、Collins ら[16]は、親密な他者との信頼感と、孤独感や自尊心の低さ、易怒性、不安感、抑うつなどの感情表出や心理的適応の問題との関係を、Bradford と Lyddon[12]は、自尊心や孤独感、人生における満足感やディストレスとの関係を調査して、青年期における重要な他者との信頼感が、子どものメンタルヘルスと関係があることを報告している。

この他にも、重要な他者を友人や教師という様に指定して研究しているものもある。重要な他者を友人とした研究では、Garnefski と Diekstra[21]が、親友との関係と子どもの精神的健康や学校などでの問題行動との関連について調査し、親友と呼べる存在がいない子どもほど、けんかや盗みなどの問題行動や、うつ病や集中力の欠如などの情緒的な問題があることを示しており、我が国でも、親友の存在が中学生の主観的健康度を高めることを

中山ら[95]が報告している。また、松井[74]は、青年期の友人関係は精神的な健康を維持し、自我を支え、対人的スキルを学習させ、生き方の指標を与えるモデルになっている、と指摘している。一方、教師を重要な他者として関連を検討している研究はあまり多くはないが、飯田[33]により、教師との関係が児童生徒の学習の基盤を成し、さらに児童生徒の学級適応や人格形成にまで影響を及ぼすことが報告されている。また Frey と Rotlisberger[20]は、教師という重要な他者は、より実用的な援助を与える「危機管理者」としてみられる傾向があり、交渉の余地の少ない、より断定的な他者として捉えられるとしており、Noller と Callan[100]は、母親に代表される重要な他者と比べると役割モデルや教師的・規範的な性格が強いとしている。Blumer[11]によると、このような特徴を持つ重要な他者としての教師は、社会的に大切な意思決定場面などにおいて、その態度、行動、発言などが個人に影響を与えると言われている。もちろん、教師だけの影響が強いわけではなく、友人との関わりが与える影響も同様に大きなものであり、その生徒の環境や人間関係によって、教師と友人双方の影響のバランスが異なるのだと考えられる。

このような重要な他者における先行研究のほとんどが、家庭や学校での対人関係に絞って研究が行われているため、より教師や友人へのコミットメントが予想される集団[152]である、スポーツ活動や運動部活動に焦点化した研究はあまり行われていない。運動部活動での教師と生徒の関係を対象にした数少ない研究を見てみても、千駄と笹本[127]や岡崎[103]、田口[135]、平野[25]の研究は、いずれも運動部活動の意義や問題点を提唱する研究であり、指導者が生徒に与える影響を、スポーツ指導者の与える社会的勢力という視点から調査した、伊藤[42][43][44][85]や森[83][84][85]の研究も、運動部活動における重要な他者としての教師や友人との関わりと、生徒の自己の形成との関係に関しては触れていない。アイデンティティ研究で、子どもの自己の形成に大きな影響を与えていると言われている、教師や友人との関わりを、一般の生徒の関わり方とは異なる運動部活動の中で検討していく視点は、非常に意義のあるものだと考える。

(5) 青年期におけるアイデンティティの確立

青年期におけるアイデンティティの確立とは、Erikson[17]が提唱した漸成的自我発達理論の青年期の発達課題の一つであり、Erikson[17]によると、「青年期には身体的・心理的・社会的変化・対人的変化が生じ、子どもとしての存在に危機が生じる。この発達における危機を同一性危機と呼び、青年はこの同一性危機を経て、社会の中で大人としての確かな自

分の存在を得ていく。このことを同一性の達成と言う。」ということである。杉村[131]によると、ここでErikson の述べる「社会」とは、国家や文化といった大規模なものから、重要な他者という小規模なものまで幅広い内容を含み、また小沢[114]によると、対人関係の変化とは、青年期にとっての重要な他者が親から仲間へと変化していくことを指すという。つまり、今まで見てきたような親との依存ー独立の葛藤を経て心理的離乳を果たし、親以外の重要な他者へと傾倒していく一連の過程である対人関係発達とアイデンティティの確立は、相互に連動している理論であると言える。

このアイデンティティが確立されていく過程を、金[53]は、「同一性形成の中心的な作業である危機を、自己の欲求・関心のみではなく他者の意見・期待を考慮したり、相談や討論といった形で他者を利用したり、自己と他者の視点の間の食い違いを交渉などの手段で解決しながら、人生の重要な選択を決定していくプロセスの中で同一性は形成される」と説明した。また、新しい自分の視点を持つまでの間には、古い視点と新しい視点とを「橋渡し」する第三者が、非常に効果的な役割を果たすことも杉村[131]によって見出された。つまり、アイデンティティの確立は、親から心理的離乳を果たし、親以外の重要な他者との関係を深めていくことで、今まで親との関係が主な刺激であった状態から抜け出し、社会や重要な他者との関わりの中で、自己の在り方を模索していく過程であり、その不安定な時期に教師や友人が大きな支えとなるということである。

青年期におけるアイデンティティの確立についての先行研究は数多く行われており、Erikson の漸成的自我発達理論の研究の中でも、アイデンティティの確立は主要なテーマの一つである。Marcia[70]はErikson の同一性概念を実証的に研究するために、「青年期の同一性の問題に対する対処の在り方」として同一性地位を提唱した。同一性地位は、危機とコミットメントという2つの基準によって分類される。危機とは、自分が社会の中でどのような考え方をするか、どのような職業に就くかという選択に際して悩んだり、迷ったりすることを意味する。コミットメントとは、社会の中での考え方や自分の就く職業に対し打ち込む活動と、その対象を将来的にも変えないという認識を意味する。この危機とコミットメントの有無によって、同一性地位は以下の4つに分類される。

① 同一性達成地位（identity achievement status）：過去に危機を経験し、現在は危機を経て得た対象にコミットメントしている。地位名のとおり、同一性を達成している。つまり、社会の中での自分の適所を得ている状態である。

② モラトリアム地位（moratorium status）：現在、危機の最中、つまり、自分が社会の

中でどのような考え方をするか、どのような職業に就くかという選択について悩んだり、迷ったりしている状態にある。モラトリアム地位の個人は、自己投入の対象を探求している最中であり、その対象を希求するものの、なかなか確信の持てないという葛藤の強い状態であり、心理的には不安定である。それゆえ、一人でいられることができず、対人的接触を求める傾向が高いと考えられる。

③ フォークロージャー地位（foreclosure status）（権威受容地位）：過去に危機がなく、現在親の期待した考え方や職業に対しコミットメントしている。つまり、親の期待を受け入れた生き方をしている状態であるといえる。

④ 同一性拡散地位（identity diffusion status）：過去の危機の有無に関わりなく、現在コミットメントしていない。地位名の通り、同一性が拡散している。つまり、社会の中に自分の適所がない状態である。

無藤[88]はこの Marcia の同一性地位を日本に適合するように修正した自我同一性地位面接を開発した。さらに加藤[49]は、Marcia の考え方を踏襲しつつ、多数のデータ収集が可能になるように同一性地位判別尺度を作成した。ほとんどの先行研究がこの Marcia の同一性地位を用いた研究であり、金[53]は 4 つの地位の中では同一性拡散地位が不適応の問題を引き起こすことが多いとし、天貝[1]も同一性拡散地位が男女ともに 4 つの地位中最も不信が高く、自分への信頼・他人への信頼が最も低かったと報告している。また、宮下と渡辺[77]は、青年期の自我同一性得点と教師との関係は相関があるとし、その時期に良い教師と出会うことで人格形成も促進されることを見出した。

Erikson の理論をスポーツ選手に当てはめた中込[92]の研究では、スポーツ競技者の同一性形成は、生活世界を異にする同世代の者と比較して、模索経験の少ない同一性形成の過程を特徴とすると指摘し、市村[41]は青年期のスポーツ経験がスポーツの持つ社会的規範を学ぶ機会を提供すると同時に、自我同一性形成という心理社会的発達課題に対する取り組みから回避させる働きをもつと報告している。また、Ogilvie と Howe[101]はスポーツや運動選手としての役割への同一化は早い年齢から始まること、また運動選手としての役割が遂行できなくなると深刻な同一性危機を引き起こす場合があることを報告している。

このようにスポーツ活動を通じたアイデンティティの形成には、一般の人々とは異なった環境要因や条件が存在するように感じられる。そこで、アイデンティティの形成を促すとされる親以外の重要な他者である、教師や友人との関係を調査することで、スポーツ選手特有の発達過程が見出される可能性が考えられるのだが、スポーツ選手を対象としたア

イデンティティ研究でも他の分野の研究と同じように、教師や友人と選手との関係をみた研究はなく、ほとんどがスポーツ選手や運動部員の同一性地位の特性を検討するものばかりである。

第4節　社会的勢力

(1) 社会的勢力の概念と先行研究

社会的勢力は、人が人に影響を与えるという潜在的な社会的影響として、Franch と Raven[19]によって提唱されて以来、多くの研究がされてきた。ちなみに、社会的勢力は行動科学領域や経営組織学領域では「Power(パワー)」という表記が好んで使用されているが、スポーツ場面では「社会的勢力」という表記で用いられるため、本研究では「社会的勢力」として論文を進めていく。

社会的勢力とは、一般に潜在的な影響力と定義されるが、今井[35]は「自分（影響者）の望むように他者（被影響者）の意見・態度・行動を変化させることのできる能力」と定義している。Cartwrihgt[15]の定義した社会的勢力の発生メカニズムをみてみると、影響者の行為の結果として、被影響者のある特定の状態に変化が生じたとすれば、影響者はその状態に関して被影響者に影響したといい、影響者が被影響者に影響する可能性をもっているとき、影響者は被影響者に対して勢力をもつとされる。そして、伊藤[42]によると社会的影響力の可否は、影響者が特定の勢力を持っていると被影響者が認知しているかどうかに規定されるという。つまり、社会的勢力は、影響を受ける側における、被影響者の理由付け、被影響者の理由の解釈であると言えるため、一人ひとり受け取り方の異なる勢力を、影響者の一方的な解釈ではなく、より被影響者側の視点で解釈できるものである。Franch と Raven[19]は、このような影響の試みを可能にする社会的勢力の基盤として、報酬（賞）勢力、強制（罰）勢力、参照勢力、正当勢力、専門勢力の5つを定義し、「勢力の基礎」と呼んだ。そしてその15年後に、Raven[118]はこの5つの勢力に情報勢力を加え、勢力の基礎を6つとした。

社会的勢力の先行研究は、欧米においては特に、組織心理学や組織行動学の領域で多く行われている。日本でも、さまざまな社会的相互作用場面において、社会的勢力を測定する試みがなされ、多くの質問紙が考案され、検討されている[23][34][35][140]。田崎[141]は、小学生を対象に、教師の社会的勢力として、親近・受容、罰、正当性、外見性、明朗性の5つを抽出し、児童のモラールとの関連を研究している。その結果、児童が教師の社会的勢力と

して、親近・受容、正当性を強く認知し、かつ罰を弱く認知している場合はモラールが高いのに対して、逆に、罰を強く認知し、正当性が弱い場合はモラールが低い傾向があったと報告している。また、教師の社会的勢力と生徒の逸脱傾向との関連を研究[142]した結果でも、教師の社会的勢力の基礎に親近・受容、正当性、明朗性を強く認知している生徒は逸脱行動が少ないのに対して、教師の社会的勢力の基礎に罰を強く認知する生徒は逸脱行動が多い傾向にあるとしている。このように、先行研究において、罰勢力にはネガティブな効果をもたらすことが確認されている。ちなみに、教師の社会的勢力の研究が盛んに行われているにも関わらず、教師の社会的勢力と生徒の人格や道徳性との関連をみた研究は皆無であり、生徒の人格形成に教師が影響を与えているであろうという世の中の経験則を心理学的に明らかにすることは非常に意義のあることであると考える。

(2) スポーツ場面における社会的勢力

学校や産業場面以外で、影響者と被影響者の関係が顕著にみられる場面としてスポーツ活動が挙げられる。社会的勢力の研究はスポーツ場面において検討されることが多く、日本では、伊藤[42)43)44)85)]、森[83)84)85)]、遠藤[85)]、豊田[85)]らが中心に行っている。彼らは、スポーツ指導場面におけるコーチの社会的勢力として、専門・参照、罰、利益、指導意欲、正当、親近・受容の6つを抽出し、それぞれの勢力の効果をコーチから被影響感、コーチへの満足感などとの関連において検討している。その結果、コーチの有する利益勢力と指導意欲勢力を高く認知している選手ほど、被影響感や満足感が高いのに対して、コーチの勢力として、罰勢力を認知している選手ほど満足感は低いものであった。また、伊藤[42)]はコーチの社会的勢力と選手の動機づけを規定すると考えられる原因帰属様式との関連を検討しており、利益、指導意欲、参照など、コーチのポジティブな勢力を認知している選手の努力帰属が高く、動機づけにとって望ましい帰属と関連していたと報告している。一方、罰勢力を認知している選手ほど負事態の原因を能力不足に帰属する傾向が認められ、選手の動機づけにネガティブな影響を与える可能性を示唆するものであった。伊藤と遠藤[44)]の適応感との関連をみた研究では、利益勢力と親近・受容勢力を強く認知する選手は適応感が高く、罰勢力を強く認知する選手は適応感が低かったと報告している。このように、コーチが選手に行う指導の効果は、その背景、あるいは基礎となる社会的勢力の種類によって異なることが示唆される。しかし、スポーツ場面における社会的勢力の先行研究は、モチベーションや満足度といった、集団生産性を上げることに焦点を当てた研究ばかりであ

り、スポーツ活動の持つ教育的側面を考慮した研究は皆無である。確かに、社会的勢力の概念自体が産業場面から生まれたものであるため当たり前のことなのだが、教師の社会的勢力を検討した研究もいくつか行われているのだから、それをスポーツ指導者に当てはめながら、生徒の人格や道徳性などの側面との関係を検討することは可能であるし、非常に意義のあることだと考える。

第5節　学校運動部活動

学校運動部活動とは、二宮[97]によると、そのスポーツを愛好するものが集まり、そこに集まった成員が共通の目標を持ち、その目標を成就せんがために身体活動を媒介とすることで、成員間の相互作用が頻繁に行われる、われわれ意識を持った集団である。また、田村[139]は、その活動特性から生徒の身体的・精神的・社会的な教育効果が期待できることで、特にいじめや不登校など、教育の荒廃が叫ばれている現代においては、思いやりや協調性、自己実現などたくましく豊かな人間性をもつ生徒の育成に、大きく貢献するものであると述べている。しかし、その様な特性を持つ運動部活動も、今回の2008年（平成20年）の学習指導要領改正[79]で初めて学校教育の一環と定義され、教育課程との関連を図るように留意することと記載された。つまり、近年まで学習指導要領に部活動の目標・内容・意義付け等の定めはなく、学校教育法施行規則にも部活動に関する規定は存在しなかったのである。

中川ら[91]によると、1947年（昭和22年）に作られた最初の学習指導要領（試案）では、実質的にクラブ活動が教育課程に位置づけられ、運動部活動は学校体育の一環として重視されたが、その後、数回の改正を経て、運動部活動は放課後や休日に行われる教育課程外に位置づけられた。1989年（平成元年）の改正では、部活動によるクラブ活動の履修代替が認められたが、1998年（平成10年）の教育課程審議会最終答申では、中学校及び高等学校においては、クラブ活動の廃止が提言され、同年の改正によってクラブ活動が正式に廃止された。この結果、クラブ活動とほぼ同意義であった部活動の在り方がより一層問われることとなった。そんな中、文部省（現・文部科学省）は2000年（平成12年）3月に「みんなでつくる運動部活動」[80]を発行し、運動部活動の意義として、以下の5つを挙げた。①喜びと生きがい、②生涯にわたってスポーツに親しむための基礎づくり、③体力の向上と健康の増進、④豊かな人間性の育成、⑤明るく充実した学校生活の展開、である。さらに茨城県教育長保健体育課[31]は、2003年に「望ましい運動部活動の在り方」を発表し、

練習時間の適切な設定や外部指導者の登用、「生きる力」の育成との関連等を提唱した。この他にも文部科学省や各自治体が答申や通達を行い、運動部活動の意義や取り組み方を提言している[54]のであるが、いずれにせよ、部活動は学習指導要領には示されない教育課程の外であり、放課後等における学校教育活動として、きわめて微妙な存在である事実は変わらなかった。そのため、森田[81]が述べているように、部活動は顧問にとって、自主的で奉仕活動のような存在になってしまい、校務の時間に追われ、部活指導をする時間がないとか、技術的な指導をできないという教員の勤務をめぐる問題や部活動の充実、管理の問題などが発生している。この様な状況の中、ついに2008年（平成20年）の学習指導要領改正[79]で、学習指導要領の中に、初めて教育課程と関連付けられた部活動の記述が掲載されたのである。教育課程との関連を図るよう記されたことによって、今後教員の勤務状態の改善や校務とのバランスが見直されていくことが期待される。

学校運動部活動に関する先行研究は、存在意義や指導者の信念に関する研究を始め、様々な研究が行われている[25)41)54)62)81)97)103)108)109)127)135)139)152)]。また、運動部活動そのものを対象としなくても、環境要因として用いる研究もあり、リーダーシップ[43)71)]や満足度[85)]など多岐に渡るが、運動部活動における生徒の人格形成に及ぼす、指導者や友人との関係はまだ明らかになっていない。森田[81]が部活動に込められた期待を、「集団活動を通して人格の再編成を促し、社会性、自主性、創造性などを育んでいく」と述べたように、運動部活動を通じた他者との関係が、生徒の人格形成を促すことは、我々の経験則の中で確実に存在するものである。今日のように、価値観が多様化した社会において、教育的な知見を経験則で終わらせるのではなく、科学的な視点から立証する努力を継続することは、運動部活動のさらなる発展に寄与するものであると考える。

第6節　先行研究のまとめと本研究の必要性

まず、Kohlbergの道徳性発達理論の先行研究では、様々な立場の人々の道徳判断の発達段階を調査することのみに止まっており、他の変数との関係をみた研究は少ない。そして、道徳判断を直接的に発達させる、役割取得の機会、認知的葛藤場面への参加、公正な場の雰囲気、といった3つの要因を用いた研究は現在の研究方法では検討することが不可能であるため、この3つの要因を促す他の要因を検討することで間接的に道徳判断の発達をみていくしかないのが現状である。また、親との依存－独立の葛藤に関する先行研究では、Marciaの同一性地位との関連は見られているものの、それをスポーツ選手に当てはめた研

究は行われていない。心理的離乳に関する先行研究は、近年ようやくその重要性が認知され、心理的離乳の適切な処理が健全な対人関係を築くことに繋がっていることが明らかにされたが、この研究もスポーツ選手に当てはめたものはまだ行われていない。そして、アイデンティティの確立に非常に大きな影響を与えている重要な他者においても、スポーツ場面で重要な他者と成りうる、指導者や友人との関係については、まだ明らかになっていない。これは、アイデンティティの確立に関する研究でも、運動部活動に関する研究でも同様の事態である。

中井と庄司[93]が述べているように、青少年の道徳性の低下やコミュニケーション能力の低下といった、さまざまな問題を抱えている今日、学校教育はその対処に負われ、未だ解決策にたどり着けないでいる一方、従来より人格形成の場として認知されてきた運動部活動への期待は益々大きくなってきている。しかし、運動部活動での経験が本当に部員の道徳性を始めとした人格形成に寄与しているのかを実証した研究は存在しない。そのため、運動部員の道徳性や心的発達段階や、それらの相互関係を明らかにすることは心理学研究にとっても、運動部活動の指導者にとっても非常に意味のあることである。よって、本研究は青年期を迎えた高校運動部員を対象として、部員の道徳判断の発達と、彼らが親との依存ー独立の葛藤を経て心理的離乳を果たし、重要な他者との関係づくりを行っていく対人関係発達の過程との関連を検討する。

ちなみに、Piaget と Kolberg[61]は、彼らの理論と Erikson のモデルの間には論理的な対応関係があることを認めており、この 2 つの理論を結びつけることによって、社会的・道徳的発達に対する、より統合的なパースペクティヴの獲得が期待できると限元[68]は述べている。上述したように、アイデンティティの確立と対人関係発達は、相互に連動して行われる過程であるから、道徳判断と対人関係発達にも何らかの関連があることは予測できる。また、発達条件を考えても、道徳判断と対人関係発達は、社会集団や重要な他者との相互関係の中で進行していく過程であるため、2 つの発達段階は、相互作用関係にあると考えられる。そして、本研究では対象者が影響を受けるであろう親以外の重要な他者を部活動内の指導者と部内の仲の良い友人に限定することで、道徳判断を発達させていく過程で、本当に部活動内の指導者や友人の存在が深く関与しているのかを検討することができる。それに加え、本研究では高校運動部員の道徳判断に指導者がどの程度影響を与えているのかを、社会的勢力という観点から捉え、どのような指導を行っていくことが彼らの道徳判断を発達させることに繋がっているのかを明らかにしていく。ちなみに、親への依存状態

における男子と女子の性差は、様々な研究[136)137)138)]が明らかにしており、男子にくらべ女子の依存状態が複雑であると考えられるため、本研究の対象である高校運動部員は男子部員に限定することとする。

本研究によって、青年期にあたる高校運動部員の道徳判断の発達と対人関係発達との関連が明らかになることで、適切な親との関係づくりや友人関係、指導者との関係を見直すことの意味が深まり、その発達段階に応じた指導が可能になると考える。また、指導者の社会的勢力の影響を検討することで、部員の道徳判断を発達させることに繋がる具体的な指導方法の提示を行うことができる。

第3章　目的

本研究の目的は以下の3つである。

1. 高校運動部員の道徳判断の段階を明らかにし、競技経験年数や役割といった基本的属性との関連を検討する。

2. 高校運動部員の道徳判断の発達と、親との依存ー独立の葛藤を果たし、親以外の重要な他者との関係作りを行う過程である対人関係発達との関連を検討する。

3. 高校運動部員の道徳判断に影響を与えると考えられる指導者の影響力を、社会的勢力の観点で捉え、指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が高校運動部員の道徳判断に与える影響を検討する。

研究の目的をより明確にするため、以下の仮説を設定した。

仮説 1：親との依存ー独立の葛藤を適切に処理し、部活動内の重要な他者に成りうる指導者や友人への信頼感が高い部員が、道徳判断の発達段階も高い段階にあるであろう。

仮説 2：高校運動部員の道徳判断に対して、社会的勢力の指導意欲勢力や親近・信頼勢力といった、行動を促進する勢力は正の影響を、罰勢力といった行動を抑制する勢力は負の影響を与えるであろう。

第4章　研究方法

本研究は、高校運動部員の道徳判断の段階を明らかにし、基本的属性との関連を分析、検討するものである。また、高校運動部員の道徳判断と対人関係発達との関連を分析、検討し、高校運動部員の道徳判断に対人関係発達と指導者の持つ社会的勢力が与える影響も分析、検討する。

尚、研究1で研究2に使用する尺度の信頼性と妥当性を分析し、研究2において上記の分析、検討を行う。

第1節　研究1

(1) 目的

研究1の目的は、研究2で使用する、親との依存ー独立の葛藤[37]、教師に対する信頼感[93]、友人への信頼感[123]、社会的勢力[83]それぞれの尺度を作成し、その妥当性、信頼性を検証することにより、質問項目を選定することである。

(2) 方法

a) 被調査者

高校運動部(硬式野球、ラグビー、バトミントンなど)に所属する男子部員301名を対象者(1年生9名、2年生169名、3年生123名、年齢範囲15-18歳、M=16.5、SD=0.64)とした。

b) 調査期間及び場所

2008年5月～6月に質問紙による調査を行った。実施場所は、教室、グランドであった。

c) 調査手続き

対象校への直接訪問しての留置き調査法にて行った。調査用紙に関しては、被調査チームの指導者、および被調査者全員に対して口頭あるいは文書を用いて説明を行った。そして、調査中、被調査者は自由に調査への参加を辞退・中断できるものとし、そのことによって一切不利益は生じないこと、また得られたデータは統計的に処理され、個人のデータが公表されることはないことを加えて説明した。

d) 質問紙の構成

研究1として、以下に示す質問項目を使用し、質問紙として実施した。(資料1)

①親との依存 - 独立の葛藤尺度

井上[37]の青年期における親との依存ー独立の葛藤が、現在どのような状態なのかを測る質問項目、計 36 項目を用いた。各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全く違うと思う」の1点から「全くそう思う」の5点までの5件法による評定尺度にて回答を求めた。得点可能範囲は36点～180点であった。

②生徒の教師に対する信頼感尺度

中井と庄司[93]の生徒の教師に対する信頼感を測る質問項目、計 31 項目を用いた。また、本研究は運動部員を対象としているため、表題及び質問項目中の「教師・先生」を「指導者」に修正して用いた。また、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全くそう思わない」の1点から「非常にそう思う」の4点までの4件法による評定尺度にて回答を求めた。得点可能範囲は31点～124点であった。

③青年期版対人信頼感尺度

酒井[123]の青年期における対人信頼感を測る質問項目、計14項目を用いた。この尺度は「○○のことは信頼できる」の○○に、親や友人などの適切な主語を当てはめて用いるものであり、本研究は部活内の友人に対する信頼感を対象とするため、○○に「仲の良い友人」を当てはめて用いた。また、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「いいえ」の1点から「はい」の4点までの4件法による評定尺度にて回答を求めた。得点可能範囲は14点～56点であった。

④スポーツ指導者の社会的勢力質問紙

森[83]のスポーツ指導者の持つ社会的勢力を測る質問項目、計38項目を用いた。また、この質問項目の主語は「監督」となっているが、本研究は部員が最も影響を受けている指導者(監督だけでなく部長やコーチも含む)を対象とするため、部員が好きな指導者を当てはめて回答できるように、質問項目の「監督」を「指導者」と修正して用いた。また、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全く当てはまらない」の1点から「よく当てはまる」の6点までの6件法による評定尺度にて回答を求めた。得点可能範囲は38点～228点であった。

e) データ処理

データ処理は、有効データ301として行われた。

(3) 分析

a) 度数分布

有効データ 301 について、各項目における平均値と標準偏差を算出し、各項目についてヒストグラムを作成した。そこから度数分布を調べたところ、親との依存 - 独立の葛藤尺度において 6 項目、生徒の指導者に対する信頼感尺度において 5 項目、青年期版対人信頼感尺度において 3 項目、スポーツ指導者の社会的勢力質問紙において 4 項目、計 18 項目において極端な偏りが見受けられ、正規分布とみなすことができなかったため、それらの 18 項目を因子分析の対象から除外することとした。

b) 因子分析の結果および因子の解釈と命名

度数分布において不適合であると見なした項目を削除し、SPSS 10.0 for Windows を用いて因子分析を行った。

①親との依存ー独立の葛藤尺度の因子分析の結果および因子の解釈と命名

因子抽出の基準を固有値 1.00 とし、30 項目で因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。そして、以下は最も安定した結果が得られた 2 因子指定の因子分析の結果である。Kaiser-Meyer-Olkin（KMO）の標本妥当性は.845 を示し、因子分析の妥当性が保証された。単純因子構造を得るため、個々の項目がいずれかの因子に対して.40 以上の因子負荷量を持つ項目を取り上げ、因子負荷量の低いその他の項目については削除した。また、著しく共通性の低い項目においても削除した。その結果、因子の解釈と命名が可能であった 2 因子 22 項目を選出した。2 因子の累積寄与率は 35.79%を占めていた。因子行列は表 2 に示す通りである。

第 1 因子は、「何かする時には、親に励ましてもらいたい」や「困ったときには親に頼りたくなる」などといった親への依存欲求に関する項目に高い負荷量を示したことから、「親への依存欲求」の因子と命名した。

第 2 因子は、「親に対して、つい反抗的な態度になる」や「親から言われたことに、よく腹を立てたりいらいらする」などといった、親からの独立欲求に関する項目に高い負荷量を示したことから、「親からの独立欲求」の因子と命名した。

表2 親との依存-独立の葛藤尺度 因子分析結果

親との依存-独立の葛藤質問項目	因子	
(信頼性係数: α)	1	2
7. 何かする時には、親に励ましてもらいたい。	.76	
15. 困ったときには、親に頼りたくなる。	.66	
17. 何か重大な決断をしなくてはならない時にはいつでも親から助言を受ける。	.65	
5. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	.62	-0.14
26. 困っているときや、悲しいときには、親には気持ちを分かってもらいたい。	.60	
29. 親には何かにつけて味方になってもらいたい。	.60	
9. 自分で決心できない時は、親の意見に従うようにしている。	.58	
24. 親が「そうだ」と言ってくれると、なんとなく安心していられる。	.58	
34. 一人で決心がつきかねる時には、親の意見に従いたい。	.57	
4. 親といつまでも一緒に暮らしたい。	.53	-0.13
12. 悪い知らせ、悲しい知らせを受ける場合には、親に一緒にいてもらいたい。	.52	
22. 小さなことでも親に相談する事が多い。	.45	
(α=.87)		
2. 親に対して、つい反抗的な態度になる。		.71
1. 親から言われたことに、よく腹を立てたりいらいらしたりする。		.68
20. ときどき、たまらなく家出したくなる。	-0.17	.65
27. 親の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。	0.16	.63
35. 親が私にやれということには反感をおぼえる。		.60
28. 親は、必要以上に私の欠点をとがめる。	0.13	.56
25. 親は自分を受け入れてくれていないと感じることもある。		.52
18. 親の親切な申し出を、特に理由なく、断ることがある。	-0.11	.48
23. 親は私をいつまでも子ども扱いにして、大人として認めてくれない。		.47
30. 親に対して、許せないと思っていることがある。	-0.11	.45
(α=.83)		

②生徒の指導者に対する信頼感尺度の因子分析の結果および因子の解釈と命名

因子抽出の基準を固有値 1.00 とし、26 項目で因子分析（主因子法　プロマックス回転）を行った。以下は、最も安定した結果が得られた 3 因子指定の因子分析の結果である。Kaiser-Meyer-Olkin（KMO）の標本妥当性は.895 を示し、因子分析の妥当性が保証された。単純因子構造を得るため、個々の項目がいずれかの因子に対して.40 以上の因子負荷量を持つ項目を取り上げ、因子負荷量の低いその他の項目については削除した。また、著しく共通性の低い項目においても削除した。その結果、因子の解釈と命名が可能であった 3 因子 23 項目を選出した。3 因子の累積寄与率は 44.81%を占めていた。因子行列は表 3 に示す通りである。

表3 生徒の指導者に対する信頼感尺度 因子分析結果

生徒の指導者に対する信頼感質問項目	因子		
(信頼性係数: α)	1	2	3
31. 私が不安なとき、その指導者に話を聞いてもらうと安心する。	.86		
11. 私が悩んでいるとき、その指導者が私を支えてくれていると感じる。	.84	0.13	
5. その指導者にならいつでも相談ができると感じる。	.77	−0.21	−0.18
25. 私はその指導者と話すと気持ちが楽になることがある。	.73	−0.18	
8. その指導者はいつも私のことを気にかけてくれると思う。	.69	0.16	0.17
23. 将来のことがわからないときはその指導者に相談してみようという気になる。	.66		
16. その指導者と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる。	.63	0.11	0.17
13. その指導者は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う。	.60		
4. その指導者は私を大事にしてくれていると感じる。	.60		0.16
(α=.91)			
18. その指導者は威張っているように感じる。		.70	
12. その指導者は自分の考えを押しつけてくると思う。		.70	
27. たとえ間違っているときでも、その指導者は自分の間違いを認めないと思う。	0.14	.64	−0.23
1. その指導者は自分の機嫌で態度が変わると思う。		.61	
29. その指導者は一部の人を、ひいきしていると思う。		.60	
14. その指導者は言ってることと、やってることに矛盾があると思う。	−0.14	.56	
10. その指導者は他の生徒と私を比べていると感じる。		.50	
15. その指導者は一度言ったことを、ころころ変えると感じる。	−0.25	.48	0.21
(α=.82)			
21. その指導者は何事にも一生懸命であると思う。		−0.12	.69
22. その指導者は正直であると思う。		−0.17	.55
17. その指導者には正義感が感じられる。	0.15		.54
30. その指導者は決まりを守ると思う。			.53
26. その指導者は教師としてたくさんの知識を持っていると思う。		0.16	.52
9. その指導者には教育者としての威厳があると思う。	0.18	0.14	.47
(α=.76)			

第1因子は、「私が不安なとき、その指導者に話を聞いてもらうと安心する」や「私が悩んでいるとき、その指導者が私を支えてくれていると感じる」などといった、指導者への安心感に関する項目に高い負荷量を示したことから、「指導者への安心感」の因子と命名した。

第2因子は、「その指導者は威張っているように感じる」や「その指導者は自分の考えを押しつけてくると思う」などといった、指導者への不信に関する項目に高い負荷量を示したことから、「指導者への不信」の因子と命名した。

第3因子は、「その指導者は何事にも一生懸命であると思う」や「その指導者は正直であると思う」などといった、指導者の正当性に関する項目に高い負荷量を示したことから、「指導者の正当性」の因子と命名した。

③青年期版対人信頼感尺度の因子分析の結果および因子の解釈と命名

因子抽出の基準を固有値 1.00 とし、11 項目で因子分析（主因子法　プロマックス回転）を行った。以下は、最も安定した結果が得られた2因子指定の因子分析の結果であ

る。Kaiser-Meyer-Olkin（KMO）の標本妥当性は.910 を示し、因子分析の妥当性が保証された。単純因子構造を得るため、個々の項目がいずれかの因子に対して.40 以上の因子負荷量を持つ項目を取り上げ、因子負荷量の低いその他の項目については削除した。ただし、第 2 因子の 1 項目で負荷量が.36 であったが質問内容を考慮し、採用することとした。また、著しく共通性の低い項目においても削除した。その結果、因子の解釈と命名が可能であった 2 因子 11 項目を選出した。2 因子の累積寄与率は 47.80%を占めていた。因子行列は表 4 に示す通りである。

表4 青年期版対人信頼感尺度 因子分析結果

仲の良い友人への信頼感質問項目	因子	
（信頼性係数：α）	1	2
11. 私は仲の良い友人には何でも話せる。	0.75	
9. 仲の良い友人は私が元気のないとき支えになってくれる。	0.71	
14. 私にとって仲の良い友人は一緒にいるだけの価値があると思う。	0.68	−0.12
13. 仲の良い友人は私の気持ちがよくわかると思う。	0.64	
7. 私は仲の良い友人が元気のないとき支えになってあげられる。	0.47	0.28
12. 仲の良い友人は私のことを信頼していると思う。	0.42	0.33
（α=.83）		
8. 仲の良い友人にとって私は一緒にいるだけの価値があると思う。	−0.11	0.87
4. 仲の良い友人は私と一緒にいて幸せだと思う。	−0.16	0.82
10. 仲の良い友人は誰よりも私が好きだと思う。	0.19	0.54
5. 仲の良い友人は私に何でも話してくれる。	0.25	0.48
2. 私は仲の良い友人に受け入れてもらえると思う。	0.29	0.36
（α=.81）		

第 1 因子は、「私は仲の良い友人には何でも話せる」や「仲の良い友人は私が元気のないとき支えになってくれる」などといった、友人への信頼感に関する項目に高い負荷量を示したことから、「友人への信頼感」の因子と命名した。

第 2 因子は、「仲の良い友人にとって私は一緒にいるだけの価値があると思う」や「仲の良い友人は私と一緒にいて幸せだと思う」などといった、友人からの信頼感に関する項目に高い負荷量を示したことから、「友人からの信頼感」の因子と命名した。

④スポーツ指導者の社会的勢力質問紙の因子分析の結果および因子の解釈と命名

因子抽出の基準を固有値 1.00 とし、34 項目で因子分析（主因子法　プロマックス回転）を行った。以下は、最も安定した結果が得られた 4 因子指定の因子分析の結果である。Kaiser-Meyer-Olkin（KMO）の標本妥当性は.917 を示し、因子分析の妥当性が保証された。単純因子構造を得るため、個々の項目がいずれかの因子に対して.40 以上の因子負荷量を持つ項目を取り上げ、因子負荷量の低いその他の項目については削除した。

また、著しく共通性の低い項目においても削除した。その結果、因子の解釈と命名が可能であった4因子26項目を選出した。4因子の累積寄与率は55.39%を占めていた。因子行列は表5に示す通りである。

表5 スポーツ指導者の社会的勢力質問紙 因子分析結果

スポーツ指導者の社会的勢力質問項目	因子			
(信頼性係数: α)	1	2	3	4
29. その指導者はよい成績や記録を持っている。	.90	-0.11	-0.22	
8. その指導者は指導者として有名な人。	.89		-0.32	0.29
2. その指導者はよい選手を育てたことがある。	.88		-0.14	
13. その指導者はよい指導者である。	.79			-0.15
33. その指導者は技術的に尊敬できる人。	.77			-0.12
14. その指導者の指示は的確である。	.77			
31. その指導者の言うことは正しいと思う。	.69			
38. その指導者の技術を盗みたい。	.66			
6. その指導者の指示に従う方が上手くいく。	.62	0.12		
3. その指導者の指示に従うと自分のためになる。	.61		0.20	
4. その指導者はよいお手本になる。	.60		0.21	
21. その指導者からは色々な技術を教えてもらえる。	.56		0.28	
17. 自分はその指導者を信頼している。	.52		0.38	
35. その指導者には自分の悪いところを直してもらえる。	.41		0.31	
(α=.94)				
11. その指導者の言うことを聞くのは当然である。		.84		
36. その指導者の言うことは守らなければならないと思う。		.82		
9. その指導者に従うのは当たり前だと思う。		.80		
24. 自分は選手だからその指導者に従うべきである。	-0.16	.72		0.10
(α=.86)				
22. 自分はその指導者に信頼されている。	-0.20		.77	
28. その指導者は自分(私)のことをよく知っている人。			.73	
1. その指導者には意欲的に指導してもらえる。	0.28	-0.18	.55	0.11
30. その指導者は熱意を持って接してくれる。	0.32		.41	
(α=.77)				
37. その指導者はこわい人。	0.17	0.11	0.15	.73
34. その指導者は無理矢理指示に従わせようとする。	-0.12			.69
32. その指導者からの罰がこわい。		0.19		.55
20. その指導者は色々とやかましい。	-0.17	-0.14		.54
(α=.70)				

第1因子は、「その指導者はよい成績や記録を持っている」や「その指導者は指導者として有名な人」などといった、指導者の持つ専門性や実績に関する項目に高い負荷量を示したことから、「専門勢力」の因子と命名した。

第2因子は、「その指導者の言うことを聞くのは当然である」や「その指導者の言うことは守らなければならないと思う」などといった、指導者に従うのは当然であるということに関する項目に高い負荷量を示したことから、「正当勢力」の因子と命名した。

第3因子は、「自分はその指導者に信頼されている」や「その指導者は自分（私）のことをよく知っている人」などといった、指導者への信頼感や指導意欲に関する項目に高

い負荷量を示したことから、「指導意欲勢力」の因子と命名した。

第4因子は、「その指導者はこわい人」や「その指導者は無理矢理指示に従わせようとする」などといった、指導者からの畏怖に関する項目に高い負荷量を示したことから、「罰勢力」の因子と命名した。

以上の因子分析により、高校運動部員を対象とした親との依存ー独立の葛藤尺度、生徒の指導者に対する信頼感尺度、青年期版対人信頼感尺度、スポーツ指導者の社会的勢力質問紙、それぞれの因子的妥当性が検証された。これは構成概念妥当性が検証されたことを示す。

c) Cronbach の α 係数

Cronbach の α 係数を各尺度の因子ごとに算出した。Cronbach の α 係数に明確な基準はないが、小塩[64]によると、α＝.70 以上で信頼性が認められると言われている。

①親との依存ー独立の葛藤尺度の Cronbach の α 係数

第1因子「親への依存欲求」でα＝.87、第2因子「親からの独立欲求」でα＝.83 であった。いずれもα＝.70 以上であり、信頼性が確認された。

②生徒の指導者への信頼感尺度の Cronbach の α 係数

第1因子「指導者への安心感」でα＝.91、第2因子「指導者への不信」でα＝.82、第3因子「指導者の正当性」でα＝.76 であった。いずれもα＝.70 以上であり、信頼性が確認された。

③青年期版対人信頼感尺度の Cronbach の α 係数

第1因子「友人への信頼感」でα＝.83、第2因子「友人からの信頼感」でα＝.81 であった。いずれもα＝.70 以上であり、信頼性が確認された。

④スポーツ指導者の社会的勢力質問紙の Cronbach の α 係数

第1因子「専門勢力」でα＝.94、第2因子「正当勢力」でα＝.86、第3因子「指導意欲勢力」でα＝.77、第4因子「罰勢力」でα＝.70 であった。いずれもα＝.70 以上であり、信頼性が確認された。

以上の Cronbach の α 係数の算出により、高校運動部員を対象とした親との依存ー独立の葛藤尺度、生徒の指導者に対する信頼感尺度、青年期版対人信頼感尺度、スポーツ指導者の社会的勢力質問紙それぞれの、妥当性、信頼性が検証された。

これら研究1の結果を踏まえ、親への依存ー独立の葛藤尺度 22 項目、生徒の指導者に対する信頼感尺度 23 項目、青年期版対人信頼感尺度 11 項目、スポーツ指導者の社会的

勢力質問紙26項目、計82項目の調査項目を設定した。また、フェイスシート上で「今現在あなたが最も影響を受けていると感じるのは誰ですか」と問い、「監督・部長・コーチ・部活の友人・親・その他」の中からひとつを選ばせた(以下、重要な他者)。さらにチーム内の役割や競技レベル、競技経験年数などの基本的属性を問い、研究2で分析、検討を行なった。

第2節　研究2

(1) 目的

研究2の目的は以下の3つである。

- 道徳判断質問紙Defining Issues Test日本版[150]（以下、道徳判断質問紙DIT日本版）を用い、高校運動部員の道徳判断の段階を調査し、基本的属性との関連を明らかにする。
- 道徳判断質問紙DIT日本版と研究1で作成した尺度を用い、高校運動部員の道徳判断と対人関係発達の関連を明らかにする。
- 道徳判断質問紙DIT日本版と研究1で作成した尺度を用い、指導者の持つ社会的勢力の各因子と対人関係発達の各因子とが道徳判断に与える影響について明らかにする。

(2) 方法

a) 被調査者

高校運動部(硬式野球、サッカー、剣道など)に所属する男子部員294名を対象者(1年生9名、2年生164名、3年生121名、年齢範囲15-18歳、M=16.5、SD=0.63)とした。

b) 調査期間及び場所

2008年6月～7月に質問紙による調査を行った。実施場所は、教室、グランドであった。

c) 調査手続き

対象校への直接訪問しての留置き調査法にて行った。また、調査用紙に関しては、被調査チームの指導者、および被調査者全員に対して口頭あるいは文書を用いて説明を行った。そして、調査中、被調査者は自由に調査への参加を辞退・中断できるものとし、そのことによって一切不利益は生じないこと、また得られたデータは統計的に処理され、個人のデータが公表されることはないことを加えて説明した。

d) 質問紙の構成

本研究の目的に沿って、年齢、学年、競技経験年数、チーム成績などといった基本的属性に加え、重要な他者や研究1において作成した質問紙を用いた。(資料2)

質問内容は以下に示した。

①親との依存ー独立の葛藤尺度

「親への依存欲求」と「親からの独立欲求」の2因子22項目からなり、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全く違うと思う」の1点から「全くそう思う」の5点までの5件法による評定尺度にて回答を求めた。「親への依存欲求」の得点可能範囲は12点～60点、「親からの独立欲求」の得点可能範囲は10点～50点であった。

②生徒の指導者に対する信頼感尺度

「指導者への安心感」と「指導者への不信」、「指導者の正当性」の3因子23項目からなり、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全くそう思わない」の1点から「非常にそう思う」の4点までの4件法による評定尺度にて回答を求めた。「指導者への安心感」の得点可能範囲は9点～36点、「指導者への不信」の得点可能範囲は8点～32点、「指導者の正当性」の得点可能範囲は6点～24点であった。

③青年期版対人信頼感尺度

「友人への信頼感」と「友人からの信頼感」の2因子11項目からなり、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「いいえ」の1点から「はい」の4点までの4件法による評定尺度にて回答を求めた。「友人への信頼感」の得点可能範囲は6点～24点、「友人からの信頼感」の得点可能範囲は5点～20点であった。

④スポーツ指導者の社会的勢力質問紙

「専門勢力」と「正当勢力」、「指導意欲勢力」、「罰勢力」の4因子26項目からなり、各質問項目に対して、どの程度自分の考えに当てはまるかについて、「全く当てはまらない」の1点から「よく当てはまる」の6点までの6件法による評定尺度にて回答を求めた。「専門勢力」の得点可能範囲は14点～84点、「正当勢力」の得点可能範囲は4点～24点、「指導意欲勢力」の得点可能範囲は4点～24点、「罰勢力」の得点可能範囲は4点～24点であった。

⑤道徳判断質問紙DIT日本版

本研究では、山岸[150]の作成した道徳判断質問紙DIT日本版の中から、Story1「ハイン

ツのジレンマ」を使用した。Story1に登場する主人公のとった行動について評価し、さらにその評価を下した時に用いたであろう判断理由11項目について、「全く重要ではない」の1点から「非常に重要」の5点までの5件法による評定尺度にて回答を求めた。そしてその11項目の中でも自分が最も大事な判断理由であると考える上位4つをランク付けさせた。そのランク付けを山岸[150]の作成した換算法に則り、道徳判断を得点化(以下、DP値)した。また、質問項目は高校生に理解できるように、若干の変更を行った。

e) データ処理

データ処理は、有効データ294として行われた。

(3) 基本的属性における道徳判断

a) 分析の目的

本項における分析の目的は、高校運動部員の道徳判断の各段階の人数を検討し、フェイスシート上で問うた基本的属性と高校運動部員の道徳判断の関連を検討することである。

b) 分析方法

各段階(2～5)のそれぞれの人数を算出し、χ二乗検定を行った。また、学年別(1～3年)や、競技成績別(全国大会出場・地方大会出場・県大会出場・地区大会出場・その他)、競技年数別(1年～4年・5年～9年・10年～14年)の各群間のDP値の差の検定を、一元配置の分散分析で行った。そして、部内での役割(レギュラー・非レギュラー)や、競技別(チーム競技・個人競技)の各群間のDP値の差の検定を、t検定で行った。分析にはSPSS 10.0 for Windowsを用いた。

(4) 道徳判断と対人関係発達の関連

a) 分析の目的

本項における分析の目的は、高校運動部員の道徳判断と対人関係発達の関連について検討することである。

b) 分析方法

生徒の指導者に対する信頼感尺度と青年期版対人信頼感尺度の各因子における項目の得点を合計した下位尺度得点(生徒の指導者に対する信頼感尺度の第2因子「指導者への不信」因子のみ得点を逆転して使用)の平均値を境にして高群、低群とし、それを指

導者への信頼感・友人への信頼感（H・H)、(H・L)、(L・H)、(L・L ）の 4 群に群分けした。また、「親への依存欲求」と「親からの独立欲求」も同様に下位尺度得点の平均値を境にして高群、低群とし、それを親への依存欲求・親からの独立欲求（H・H)、(H・L)、(L・H)、(L・L ）の4群に群分けし、これら2要因(以下、指導者H(L)・友人H(L)×依存H(L)・独立H(L))の各群間のDP値の差の検定を、2要因の分散分析で行った。分析にはSPSS 15.0 for Windowsを用いた。

(5) 指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響

a) 分析の目的

本項における分析の目的は、高校運動部員が指導者から認知する社会的勢力の各因子と対人関係発達の各因子が道徳判断に与える影響について検討することである。

b) 分析方法

本研究で扱う社会的勢力は、指導者に限定したものであるが、実際の重要な他者は指導者以外にも考えられる。そのため、指導者を重要な他者であると認知している者と、そうでない者とでは、指導者に感じる社会的勢力に違いがでるのではないかと考えた。そこで、フェイスシート上で質問した重要な他者において、監督、部長、コーチ、部活の友人、親の5群に分け、各群に対し、社会的勢力の各4因子の合計得点と「親への依存欲求」、「親からの独立欲求」の各因子の合計得点、また生徒の指導者に対する信頼感尺度、青年期版対人信頼感尺度の下位尺度得点の計8要因を、DP値を規定する要因とした、重回帰分析を行った。分析にはSPSS 10.0 for Windowsを用いた。

第5章　結果

第1節　基本的属性における道徳判断

(1) 高校運動部員の道徳判断の段階

まず、高校運動部員の道徳判断の段階を明らかにするために、高校運動部員の道徳判断の各段階の人数を図2にまとめた。図2によると、個人主義的道具的道徳性を持つ第2段階は28名、対人的規範の道徳性を持つ第3段階は202名、社会システムの道徳性を持つ第4段階は64名であり、第3段階の道徳判断に達している者が67%と2／3以上いることが明らかにされた。

そこで、χ^2検定を行ったところ、0.1%水準で有意（$\chi^2_{(2)}$=172.163, p<.001）であり、高校運動部員における道徳判断は第3段階が最も多いことが確認された。

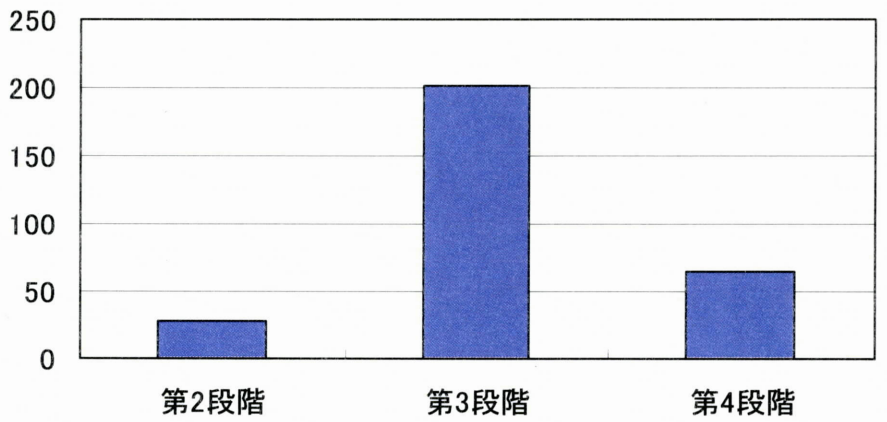

図2　高校運動部員の道徳判断の段階別人数

(2) 基本的属性における道徳判断得点DP値の得点比較

a) 競技経験年数でみたDP値の比較

競技経験年数別（1年～4年=30名, 5年～9年=182名, 10年～14年=82名, 計294名）の各群間のDP値の差の検定を、一元配置の分散分析、及びTukey-HSD法による多重比較で行った。結果は表6の通りである。

表6 競技経験年数でみたDP値の比較

競技経験年数	N	M	SD	
1年 ～ 4年	30	349.7	51.86	
5年 ～ 9年	182	352.0	47.60	*
10年 ～ 14年	82	368.5	46.29	
全体	294	356.4	48.12	
F値		3.69*		

*;p<.05

表6によると、競技経験年数1年～4年群よりも5年～9年群の方が部員のDP値は高く、さらに5年～9年群よりも10年～14年群の方が高くなることから、競技経験年数が長くなるにつれ、部員のDP値も高くなることが示された。分散分析の結果は5%水準で有意(F(2,291)=3.69,p<.05)であり、多重比較の結果は、競技経験年数10年～14年群の部員のDP値が5年～9年群に比べ5%水準で有意に高いことが示された。

b) 部内での役割別にみたDP値の比較

部内での役割であるレギュラー群(90名)と非レギュラー群(197名)間のDP値の差の検定をt検定で行った。結果は、表7の通りである。

表7 役割別にみたDP値の比較

	レギュラー N=90	非レギュラー N=197	t値
DP値	364.9 (46.21)	352.9 (47.54)	2.01*

数値は平均値,()内はSD　*;p<.05

表7によると、レギュラー群の方が非レギュラー群より、DP値が高い値を示した。t検定の結果は、t値が5%水準で有意(t(285)=2.01,p<.05)であった。これにより、部活動内でレギュラーである部員の方が、非レギュラーの部員よりDP値が高いことが示された。

c) その他の基本的属性でみたDP値の比較

学年別(1～3年) や、競技成績別(全国大会出場・地方大会出場・県大会出場・地区大会出場・その他)のそれぞれの群間のDP値の差の検定を一元配置の分散分析で行い、またチーム競技群と個人競技群間のDP値の差の検定をt検定で行ったが、いずれも有意な結果は示さず、ほとんど差は確認されなかった。

第2節　道徳判断と対人関係発達の関連

道徳判断得点DP値と対人関係発達の関連を検討するために、指導者への信頼感・友人への信頼感(H・H, H・L, L・H, L・L)×親への依存欲求・親からの独立欲求(H・H, H・L, L・H, L・L)のそれぞれの群間のDP値の差の検定を2要因の分散分析で行った。しかしその結果、分散に有意な差は見られなかった。そこで、第1節における競技経験年数とDP値の関連を参考に、高校3年生は最低でも高校から競技を始めた部員、高校1年生は最低でも中学時代も同じ競技を行っていた部員に対象を絞るために、競技経験年数3年以上の部員(255名)を対象として分析を行った。結果は以下の通りである。

表8によると、DP値に「指導者・友人への信頼感」が主効果($F(3, 239)=7.03, p<.001$)を与えていることが示された。一方、「親への依存欲求・親からの独立欲求」には主効果が確認されなかった。

表8 「指導者・友人への信頼感」と「親への依存欲求・親からの独立欲求」の分散分析表

	F値
親への依存欲求・親からの独立欲求(A)	0.98
指導者への信頼感・友人への信頼感(B)	7.03***
(A)×(B)	2.28*

*; p<.05, ***; p<.001

まず、「指導者・友人への信頼感」の各群のDP値の差をみてみると(表9)、指導者H・友人H群と指導者H・友人L群が比較的高く、指導者L・友人L群が最も低い値を示した。そこで、Tukeyの多重比較を行った結果、指導者H・友人H群が指導者L・友人L群に比べ、DP値が1%水準で有意に高く、指導者H・友人L群も指導者L・友人L群に比べDP値が0.1%水準で有意に高かった。

表9 「指導者への信頼感・友人への信頼感」
各群のDP値の多重比較

指導者・友人	N	M	SD		
H・H	58	362.2	6.15		
H・L	69	363.6	5.49		
L・H	41	354.0	6.98	**	***
L・L	87	333.8	4.90		

;p<.01, *;p<.001

また、DP 値に対する「指導者・友人への信頼感」×「親への依存欲求・親からの独立欲求」の交互作用(F(9,239)=2.28,p<.05)も確認された。そこで、単純主効果の検定(表 10)を行った結果、「親への依存欲求・親からの独立欲求」の依存 L・独立 H 群において、「指導者・友人への信頼感」の単純主効果が有意(F(3,239)=7.33,p<.001)であり、依存 H・独立 L 群においても有意(F(3,239)=4.06,p<.01)であった。

表10 「親への依存欲求・親からの独立欲求」の各群
における「指導者・友人への信頼感」の単純主効果

「親への依存欲求・親からの独立欲求」	F 値
依存L・独立H	7.33***
依存L・独立L	0.18
依存H・独立H	1.65
依存H・独立L	4.06**

;p<.01, *;p<.001

そこで、「親への依存欲求・親からの独立欲求」における「指導者への信頼感・友人への信頼感」各々の群間の DP 値の差をみてみると(表 11)、依存 L・独立 H 群においては、指導者 H・友人 H 群と指導者 H・友人 L 群が比較的高い値を示し、指導者 L・友人 L 群が最も低い値を示した。また、依存 H・独立 L 群においては、指導者 H・友人 L 群が最も高い値を示し、指導者 L・友人 L 群が最も低い値を示した。そして、Tukey の多重比較を行った結果、まず依存 L・独立 H 群において、指導者 H・友人 H 群が指導者 L・友人 L 群に比べ DP 値が 1%水準で有意に高く、指導者 H・友人 L 群も指導者 L・友人 L 群に比べ DP 値が 0.1%水準で有意に高かった。また、依存 H・独立 L 群においては、指導者 H・友人 L 群が指導者 L・友人 L 群に比べ DP 値が 1%水準で有意に高かった。

表11 「親への依存欲求・親からの独立欲求」における「指導者への信頼感・友人への信頼感」の各群のDP値の多重比較

親への依存欲求 親からの独立欲求	指導者への信頼感 友人への信頼感	N	M	SD	
依存L・独立H	指導者H・友人H	8	386.3	15.61	
	指導者H・友人L	24	375.4	9.01	
	指導者L・友人H	11	346.4	13.31	** ***
	指導者L・友人L	26	324.2	8.66	
依存H・独立L	指導者H・友人H	21	348.3	9.64	
	指導者H・友人L	12	375.0	12.75	
	指導者L・友人H	8	340.6	15.61	**
	指導者L・友人L	14	315.0	11.80	

依存L・独立Lと依存H・独立Hの結果は省略　　**;p<.01, ***;p<.001

次に、「指導者・友人への信頼感」の単純主効果の検定(表 12)を行った結果、指導者 L・友人 L 群において、「親への依存欲求・親からの独立欲求」の単純主効果が有意(F(3, 239)=3. 01, p<. 05)であった。

表12 「指導者・友人への信頼感」の各群における「親への依存欲求・親からの独立欲求」の単純主効果

「指導者への信頼感・友人への信頼感」	F 値
指導者H・友人H	1.49
指導者H・友人L	1.60
指導者L・友人H	1.71
指導者L・友人L	3.01*

*;p<.05

そして、「親への依存欲求・親からの独立欲求」における「指導者への信頼感・友人への信頼感」各々の DP 値の差をみてみると (表 13)、指導者 L・友人 L 群において依存 L・独立 L 群が最も高い値を示し、依存 H・独立 L 群が最も低い値を示した。そこで、Tukey の多重比較を行った結果、指導者 L・友人 L 群において、依存 L・独立 L 群が依存 H・独立 L 群に比べ DP 値が高いという有意傾向があることが示された。

表13 「親への依存欲求・親からの独立欲求」における「指導者への信頼感・友人への信頼感」の各群のDP値の多重比較

指導者への信頼感 友人への信頼感	親への依存欲求 親からの独立欲求	N	M	SD	
指導者L・友人L	依存L・独立H	26	348.3	9.64	
	依存L・独立L	27	375.0	12.75	†
	依存H・独立H	20	340.6	15.61	
	依存H・独立L	14	315.0	11.80	†

指導者H・友人Hと指導者H・友人L、指導者L・友人Hの結果は省略　†;p<.10

この結果から、指導者や友人といった重要な他者は、親への依存欲求が低く、独立欲求が高い状態と、親への依存欲求が高く、独立欲求が低い状態の場合に、高校運動部員の道徳判断に影響を与えていることが示唆された。また、部活動内の指導者や友人への信頼感が低い場合には、親への心的欲求が低次である状態か、親への依存欲求が高い状態において、道徳判断の発達に影響を与えていることが示された。

第3節　指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響

フェイスシート上で質問した重要な他者を、監督(86名)、部長(6名)、コーチ(19名)、部活の友人(71名)、親(16名)の5群に分け、各群に対し、社会的勢力の各4因子の合計得点と「親への依存欲求」、「親からの独立欲求」の各因子の合計得点、また生徒の指導者に対する信頼感尺度、青年期版対人信頼感尺度の下位尺度得点の8要因を、DP値を規定する要因とした、重回帰分析を行った。尚、人数の関係で分析が不可能であり、数値的にも有意な傾向が見られなかった「2.部長」、「3.コーチ」、「5.親」の結果は省略した。

(1) 重要な他者を監督とした高校運動部員

重要な他者を監督とした高校運動部員の道徳判断に、指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が与える影響を検討するために、上記の8要因を、DP値を規定する要因とした重回帰分析を行った。結果は、以下の通りである。

まず、表14によると重要な他者を監督とした高校運動部員のDP値における重回帰分析は有意($F(8,77)=2.819, p<.01$)であり、重決定係数は$R^2=.227$であった。そこで、標準偏回帰係数(β)について説明すると、「正当勢力」($\beta=.279$)と「指導意欲勢力」($\beta=.438$)に

5%水準で有意な正の係数が示された。また、「親からの独立欲求」（β=-.233）には 5%水準で負の係数が示された。他の独立変数はDP値に対し、説明力を持たなかった。

以上の結果から、重要な他者を監督とした高校運動部員のDP値には、「正当勢力」と「指導意欲勢力」が正の影響を、「親からの独立欲求」が負の影響を与えていることが明らかにされた。監督を重要な他者と認知している部員は、監督に充分コミットメントすることが、道徳判断の発達を促す要因を受けやすくなり、親からの独立欲求ばかりが高まりすぎると、道徳判断の発達を妨げるということが示唆された。

表14 重要な他者を監督、部活の友人とした高校運動部員のDP値を規定する要因の重回帰分析

	重要な他者			
	監督 N=86		部活の友人 N=71	
独立変数	M (SD)	β	M (SD)	β
親への依存欲求	29.63 (7.57)	.083	31.14 (8.02)	.076
親からの独立欲求	26.90 (6.81)	-.233*	27.63 (6.73)	-.003
指導者への信頼感	65.48 (11.46)	-.127	62.72 (9.79)	-.064
友人への信頼感	32.98 (5.39)	-.142	32.01 (6.41)	.359**
勢力1因子 専門勢力	66.86 (12.26)	-.092	59.73 (11.84)	.339*
勢力2因子 正当勢力	18.24 (4.48)	.279*	18.21 (3.62)	.028
勢力3因子 指導意欲勢力	17.43 (3.77)	.438*	15.49 (3.11)	-.213
勢力4因子 罰勢力	11.64 (4.16)	-.024	10.70 (3.84)	-.065
R^2		.227**		.232*

*;p<.05 **;p<.01

(2) 重要な他者を部活の友人とした高校運動部員

重要な他者を部活の友人とした高校運動部員の道徳判断に、指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が与える影響を検討するために、上記の8要因を、DP値を規定する要因とした重回帰分析を行った。結果は、表14の通りである。

表14によると、重要な他者を部活の友人とした高校運動部員のDP値における重回帰分析は有意($F(8,62)=2.336, p<.05$)であり、重決定係数は$R^2=.232$であった。そこで、標準偏回帰係数(β)について説明すると、「友人への信頼感」($\beta=.359$)は、1%水準で有意な正の係数が、「専門勢力」($\beta=.339$)は5%水準で有意な正の係数が示された。他の独立変数はDP値に対し、説明力を持たなかった。

以上の結果から、重要な他者を部活の友人とした高校運動部員のDP値には、「友人への信頼感」と「専門勢力」が正の影響を与えていることが明らかになった。友人を重要な他者と認知している部員は、友人との関わりの中で自らの道徳判断の発達を促す機会を得ていき、指導者には競技の専門的な指導を受けることで、さらにその機会を得ていくということが示唆された。

第6章　考察

第1節　道徳判断得点DP値の比較

(1) 高校運動部員の道徳判断の段階

図2は、高校運動部員の道徳判断の段階を検討するために、各段階の人数でχ二乗検定を行ったものである。高校運動部員の道徳判断の段階は、対人的規範の道徳性を持つ第3段階が最も多く、0.1%水準で有意であった。山岸[145]が、一般の小学生と中学生、高校生、大学生を対象とし、道徳判断の順序性を確認した研究では、対象人数が少数であったものの、高校生において、第3段階が50%、第4段階が45%、第5段階が5%であったと報告しており、本研究の結果が、第2段階が9.5%、第3段階が68.7%、第4段階が21.7%ということから、山岸の研究と比較的同程度の結果を得ることができたと言える。だた、本研究が対象とした高校運動部員には第5段階に達している部員が一人もおらず、第2段階が若干見られたのに対し、山岸の研究では第5段階に達している生徒が、わずかだが見受けられ、第2段階に止まっている生徒は中学生までで、高校生では一人もいなかった。この結果から、Kohlbergの道徳性発達理論という枠組みでみると、運動部員は一般の生徒よりも、比較的道徳判断の発達が遅れているという多くの研究が指摘している結果[8)13)108)117)128)]を本研究も裏付けることとなった。その理由としては、第3段階は他者に対する信頼や忠誠、尊敬、感謝という相互関係を維持することに意味を感じていることが挙げられる。目標達成集団であり、他者への配慮が必要となってくる運動部活動では、そのような道徳判断が多くなることは確かに予想できる。そしてその中でも、学校教育の中の運動部活動であるという役割や、部活を維持するために必要な規則をどのように機能させていくかといった、社会システムの観点を取得している若干の部員は、第4段階へ移行しているのであろう。また、第2段階が少数ではあるが見受けられたことを検討してみると、運動部活動自体がしっかり機能していないことで、他者の視点に立って判断する機会がほとんどなく、部員達の好き勝手に行われていることや、競技中には重要な観点である利害関係を、まだ実生活と分離できずに、道徳判断もそのレベルでとどまっていることなどが考えられる。

(2) 基本的属性における道徳判断得点DP値の得点比較

a) 競技経験年数でみたDP値の比較

表6は、道徳判断得点DP値を、競技経験年数別に一元配置の分散分析、及びTukey-HSD法による多重比較でみた結果である。この結果から、競技経験年数を重ねて行くにつれてDP値も上がっていること、また5年～9年群と10年～14年群の差が、5%水準で有意であるということが示された。これは、スポーツ活動の経験年数とDP値は関係性がないとしたProiosら[117]の研究と、異なった結果となった。その原因としては、欧米の先行研究のほとんどが、大学生や社会人のスポーツ経験年数を問うているものであり、比較的道徳判断が発達している状態から始めたスポーツの経験年数による群分けであったため、あまり差が出なかったのではないかと推測される。同じ競技経験年数10年～14年でも、欧米の研究の対象者は高校生やそれ以降に始めたことになるのに対し、本研究が対象としたのは高校生であるため、小学校に入学する前からその競技を行っていることになる。これほど幼少から競技に参加していれば、彼らの人生の大半をその競技に費やしていることになるので、その影響は計り知れない。このことから、本研究の対象である幼少期からスポーツ活動を行ってきた生徒にとっては、競技で得た経験がDP値に影響を与えていることが示唆される。やはり、発達段階の途中である子どもにとって、運動部活動はその発達を促進してくれる要素を持ったものであるのだろう。

b) 部内での役割別にみたDP値の比較

表7は部内での役割別にt検定を行った結果である。この結果から、レギュラー群の部員の方が非レギュラー群の部員より、DP値が5%水準で有意に高いことが示された。高校・大学の野球部員のコミットメントについて研究した菊池[52]は、レギュラー群はベンチ外群よりも「役割」に対するコミットメントが有意に高いことを報告しており、その理由として、組織活動への関与の度合いの違いを挙げている。この研究から、運動部活動のレギュラー群は、組織活動への関与という第4段階的な観点での判断が要求される立場にいることになるため、非レギュラー群より道徳判断を得る機会は多くあると考えられる。また、Kohlberg[57]自身も、道徳判断の発達を促す役割取得能力は、「グループにおける相互作用とコミュニケーションの量そのもの」によって獲得されると述べており、役割による集団へのコミットメントの度合いが、道徳判断の発達に影響を与えていることが考えられる。

c) その他の基本的属性でみたDP値の比較

学年別(1～3年) や、競技成績別(全国大会出場・地方大会出場・県大会出場・地区大会出場・その他)の各群のDP値の差の検定を、一元配置の分散分析で行ったが、両方とも有意な結果は見られなかった。まず、学年別で差が見られなかった理由としては、同じく学年別でDP値を測定した山岸[145]の研究のように、幅広い年齢層で比較できなかったことが挙げられる。山岸の研究は、小学校5年から大学生までの範囲で測定していたため、Kohlbergが指摘した、年齢に伴う道徳判断の発達傾向を裏付けるものであったが、本研究の対象は高校生のみであったため、1年から2年の幅でしか測定できなかった。これは本研究の今後の課題の一つであり、対象を中学生から大学生と幅を広げて研究することで、学年別でも変化が見られるような結果を得ることができると考える。

次に、競技成績別にみたDP値の比較に差が見られなかった理由は、道徳判断の発達条件の特徴に拠るものであると考えられる。道徳判断を促す、集団へのコミットメントやコミュニケーションの量というのは、競技成績を残していく上で必要な条件であるため、一見競技成績が高い部活動の方が、比較的DP値も高くなるように感じるが、競技成績が良いと言うことは、その分レギュラー争いが厳しく、勝利至上主義に陥ってしまう可能性が考えられる。つまり、関連文献の考証でも述べたように、運動部活動によって得る可能性のあった規範や道徳性を失う状態になっているのであろう。よって、確かに道徳判断の発達を促す要因は、競技成績を上げる要因にも成っているのだが、スポーツの持つマイナスな面との相互作用で相殺されてしまい、競技成績別では道徳判断の発達に差は確認されなかったと考えられる。しかし、この結果を逆に捉えれば、スポーツの持つマイナス面さえ取り除けば、競技成績と道徳判断の発達の両方を獲得できるということである。つまり、指導者がどこまでが人格形成を促し、どこまでが競技成績重視の偏った指導になるのかを認識し、適切な指導を行えば、人格形成と競技成績は両立しえるものであると考える。

また、競技別（チーム競技・個人競技）の群間のDP値の差の検定を、t検定で行ったが、こちらも有意な結果は見られなかった。この結果は、競技によって道徳判断の発達が異なるとした、欧米の先行研究とは異なる結果であり、日本の運動部活動の持つ特性と欧米のそれとの違いが影響したものであると考える。おそらく、スポーツ活動という端的な視点から見れば、チーム競技と個人競技では、目標のための個人の責任に対する考え方に違いがあると思われるが、日本の運動部活動の場合はチーム競技であろうと、

個人競技であろうと、部活動を皆で運営していく為の意識や責任に差異はないと考えられるため、単なるスポーツ活動ではなく、目標達成集団としてのコミットメントしていることが色濃く出た結果であると推測できる。小島[62]の述べている通り、日本の生徒にとって、運動部活動とはそれほどまでに学校生活の中でも特別な存在なのである。

第2節　道徳判断と対人関係発達の関連

道徳判断得点DP値と対人関係発達の関連を検討し、仮説1を検証するために、競技経験年数3年以上の高校運動部員を対象とし、「指導者への信頼感・友人への信頼感」(H･H, H･L, L･H, L･L)×「親への依存欲求・親からの独立欲求」(H･H, H･L, L･H, L･L)の各群間のDP値の差の検定を、2要因の分散分析で行った。その結果、DP値に「指導者への信頼感・友人への信頼感」が主効果を与えていることが明らかになった。そこで多重比較を行った結果、指導者H・友人H群と指導者H・友人L群の方が、指導者L・友人L群より、DP値が有意に高かった。この結果から、部活動内の指導者や友人を重要な他者としている群は、家族以外の他者と信頼関係を築き、権威性や価値基準を取り入れることになるので、道徳判断を発達させる機会が多くなることが考えられる。また、年長者である指導者にコミットメントしているということは、道徳判断と年齢との相関関係[151]を考えれば、常に自分の道徳判断より高次の道徳判断の助言を受けていることになる。Kohlberg[56]の報告にもあるように一段上の道徳判断の助言を受けていることが、指導者を重要な他者とする高校運動部員の道徳判断を発達させたのだと考えられる。ちなみにここでは、指導者が高校運動部員の道徳判断より低次の段階であった場合を考える必要はない。なぜなら、Power[116]によると、自分の道徳判断より低次の道徳判断には不信感や不適応を起こすとされているからである。そのため、指導者への信頼感が高い部員の道徳判断が、その指導者の道徳判断より高いということはないのである。一方、部活動内に重要な他者が存在しない群は、その部活動にコミットメントしていない状態であるから、道徳判断の発達に必要な要因を得る機会を逃していまい、結果的に部活動にコミットメントしている群より道徳判断が低い状態となったと考えられる。

また、DP値に対する「指導者・友人への信頼感」×「親への依存欲求・親からの独立欲求」の交互作用も確認され、「親への依存欲求・親からの独立欲求」への単純主効果の検定の結果は、依存L・独立H群と依存H・独立L群において「指導者・友人への信頼感」の単純主効果が有意であった。この結果から、指導者や友人といった部活動内の重要な他者が、

高校運動部員の道徳判断に与える影響は、彼らが親からの依存欲求が低く、独立欲求が高い状態、もしくは親への依存欲求が高く、独立欲求が低い状態で顕著にみられるということが明らかになった。多重比較の結果を見てみると、依存L・独立H群に関して、指導者H・友人H群と指導者H・友人L群の方が指導者L・友人L群より、DP値が有意に高かった。依存L・独立H群は、親から心理的離乳を果たした状態であると解釈でき、その後で部活動内の重要な他者の影響を受けているため、この結果は道徳判断の発達に影響を与える環境要因の順序性を示すものと考えることができる。つまり、Erikson[17]が示唆した様な、親との一対一の関係から、社会集団の様々な他者の中でアイデンティティを形成していく過程と、道徳判断の発達に影響を与える環境要因は、相互に連動しながら重層的に展開していることが示唆された。一方、依存L・独立H群の中で、有意に道徳判断が低かった指導者L・友人L群に関してのみ、依存L・独立H群は、親との心理的離乳を果たした状態ではないと考えられる。なぜなら、この群は部活動内に重要な他者が存在しないからである。山田[144]が「同一性拡散地位の子は、生き方モデルを得ていない状態である。」と述べているように、生き方モデル、すなわち重要な他者が存在しない部員にとっての依存L・独立Hの解釈は、親への依存を抑制し、無理に独立しようとする状態であるとも考えられ、井上[37]の研究によると、Marcia[70]の同一性地位でいう同一性拡散地位であると思われる。この地位は親から独立することにエネルギーが注がれ、同一性の探究が困難になってしまい、親以外の重要な他者との関係が構築されにくい地位である。そのため、部活動へのコミットメントも低くなる可能性もあるので、道徳判断を発達させる機会を得るのは難しい状態であると推測できる。この結果から、心理的離乳が適切に行われずに、自分が生活する集団の中に重要な他者がいないという状態は、道徳判断の発達には非常に不利な環境であるということが示唆された。以上のことから、指導者は、親から心理的離乳を果たしている部員にとっての運動部活動とは道徳判断を発達させる要因を提供することのできる最も身近な機会であることを認識し、彼らがコミットメントできる部内の環境づくりを行っていかなければならない。また、同一性拡散地位の部員に関しては、保護者との連携を密に行い、同一性を確立する過渡期であることを共に認識し、焦らず長い目で部員を指導することが、彼らが同一性を確立していく過程の中で重要なことだと考える。

そして、依存H・独立L群に関しては、指導者H・友人L群の方が指導者L・友人L群より、DP値が有意に高いという結果が確認された。依存H・独立Lという状態は、親に依存しきっていて、親との心的葛藤をまだ経験していないと解釈でき、Marcia[70]の同一性地位

で言うと、フォークロージャー地位(権威受容地位)にあたる。山田[144]によると、この地位は、親の社会的通念をそのまま受け入れているので、指導者H・友人L群は親以外の年長者である重要な他者にも親同然の依存傾向を起こしている可能性がある。そして、Kohlberg[58]が道徳判断にとって、認知能力は必要条件であると指摘したことからもわかるように、おそらく部員より道徳判断の段階が高いことが推測される年長者である重要な他者の道徳判断を、そのまま道徳的知識として受け入れている結果、比較的道徳判断が高く出たのだと考えられる。しかし、この場合、道徳判断の段階が高いからといって、実際の葛藤場面でより高次の安定した判断ができるとは限らない。杉原[130]は、事例による臨床的考察でフォークロージャー地位では潜在的に同一性拡散傾向をもつ青年がいることを指摘しており、Podd[115]は道徳判断における認知構造の安定化に対して、自我機能が関与することを示唆している。つまり、自我が不安定で、これから危機を迎えると解釈できる依存H・独立L群の指導者H・友人L群は、自分の本来の段階と、重要な他者との段階が混同している状態であると考えられるので、葛藤場面によって高次だったり低次だったり、一貫しない道徳判断を行う可能性がある。そのため、フォークロージャー地位に関しては道徳判断が示す値をそのまま鵜呑みにすることはできない。この結果から、道徳判断はやはり、認知的葛藤を経て構築していくものであり、自我の発達段階的にも危機を経験してないフォークロージャー地位のような状態は、見せかけの道徳段階になる恐れがあることを示唆している。一方、指導者L・友人L群は、親に依存し、なおかつ部活動内に重要な他者が存在しない状態であると考えられる。つまり、親以外の他者から道徳判断に必要な要因を受けることがほとんどないため、親からの影響しか受けないということである。Kohlberg[58]は道徳判断の発達に関して、一対一の関係が基本体系である親子関係の与える影響の限界を示唆しており、複数の対人関係が含まれる社会や集団に属すことの重要性を指摘しているため、この群は社会システムの観点を持つ第4段階にはほど遠く、他者から期待された役割を遂行していく第3段階に属す部員が多かったのだと推測できる。そのため、指導者の価値観をそのまま受け入れている指導者H・友人L群の方が、親しか道徳判断の発達を促してくれる対象がいない指導者L・友人L群より、道徳判断が高い値を示したと考えられる。しかし、上記で述べたように、不安定で見せかけの道徳判断では真の高次の道徳判断であるとは言えない。このことを指導者は充分考慮し、道徳判断の発達段階だけでなく、部員が今どのような自我の発達段階にいるのかを把握しておく必要性があるのではないだろうか。

次に「指導者・友人への信頼感」における単純主効果の検定を行い、指導者 L・友人 L 群において、「親への依存欲求・親からの独立欲求」の単純主効果が有意であった。この結果から、部活動内に重要な他者がいない状態においてのみ、親からの依存ー独立の葛藤が道徳判断に与える影響を確認することができると示された。多重比較の結果を見てみると、依存 L・独立 L 群が依存 H・独立 L 群より、DP 値が高いという有意傾向を示した。この状態は非常に特異なものであり、本研究では三つの解釈の可能性があると考えられた。

まず一つ目の解釈は、依存 L・独立 L 群という葛藤への無関心状態は、高橋[136]が「自立とは依存の形態の変容であり、自立は依存を基礎にして果たされるものである。」と述べていることから考えると、親への依存欲求自体がまだ生起していない可能性があり、親への依存欲求が高いフォークロージャー地位よりも前段階の状態にあると考えられる。また、部活動内に重要な他者がおらず、佐藤[125]が「初期の対象（両親、特に母親）への愛着の仕方が、その後の他の対象への愛着の仕方や一般的な対人関係の持ち方を規定する。」と述べていることからも、幼少期に親との適切な関係が形成されなかった可能性が考えられる。しかし、この解釈では道徳判断が比較的高い値を示した理由を説明することはできない。

そこで依存 L・独立 L 群の状態を説明する、二つ目の解釈は、この群は小此木[104][105]の言うモラトリアム人間にあたるのではないかという解釈である。モラトリアム人間とは、自分自身を定義せず、何事に対しても持続的な責任をもって関わらない人のことであり、彼らは原則を持つことなく、全てに相対的な態度をとり、状況に応じて自由に自己を変えていこうとする。また、当事者意識が希薄で自己中心的あるいは自己愛的な心理状態である。その一方で、自分を定義せず何にもコミットメントしないために、原則的水準の思考をすることも可能であるという。このことから、どの対象にもコミットメントすることなく、道徳判断の発達段階が比較的高い値を示した依存 L・独立 L 群は、このモラトリアム人間に当てはまると考えられる。本来、モラトリアムとは、Erikson[17]が定義したように、同一性の確立までの猶予期間のことであり、社会秩序からみると半人前の修業期間として、様々な禁欲が課せられ、青年にとっては一刻も早く抜け出したい拘束であり、制限であった。しかし、小此木[104]によると、経済成長による国民の総中流化に伴い、このモラトリアムは修業の期間ではなく、経済的に大人にならなくても欲求を充足できる居心地の良い期間になってしまったのである。そのため、本来のモラトリアム期間の青年が感じていた、引け目や劣等感といった半人前意識は、次第に裏付けのない全能感へと変わっていき、その全能感から本来依存すべき対象への依存を否定し、独立欲求さえも欠如させてしまうという、

現代の青年特有のモラトリアムの心理を生み出してしまったのである。しかし、小此木[104]によると、彼らの在り方は、変化の激しい現代社会における適応的な在り方とされているし、現代社会で取り得る唯一の有効な戦略と捉えられている。だが、Erikson の理論で言えば、青年期の発達課題で止まっている状態であるため、成熟の放棄と言えるし、全能感による言行の不一致が顕著であるので、社会的な関わりを回避し続ける無責任な状態である。小此木[104]が、「モラトリアム人間を頼みにして、何か事をなすことくらい、あてにならないことはない」と述べているように、このモラトリアム人間は明らかに社会的には生きにくい存在であり、これを脱することが、その個人の人生にとって重要なことであるのは明確である。そのためには、モラトリアム人間がコミットメントする価値を見出すような魅力ある対象の存在が不可欠であるし、それを促す他者の関わりも重要である。村澤[86]によると、近年問題となっているひきこもりも、モラトリアム人間の特性が顕著に表れたものであり、モラトリアム人間は現代の社会的性格になりつつあるという。このように社会問題にまで発展してきたモラトリアム人間が、その状態からどのように脱していくのかを検討することは、これからの青年心理学研究にとって重要なテーマの一つになるであろう。以上のことから、二つ目の解釈であるモラトリアム人間としての依存L・独立L群の道徳判断は、フォークロージャー地位の群と同じく、不安定で自ら獲得した道徳判断ではない、見せかけの道徳判断であると考えられる。この場合、指導者はまず彼らのアイデンティティの模索を促すことから始めなければならないため、そのために彼らがコミットメントできるような部活動の魅力が必要であるし、指導者にも熱意や指導力が要求されるであろう。

次に三つ目は、すでに親との依存ー独立の葛藤を達成した群であるという解釈である。井上[37]の研究では、親への依存欲求と親からの独立欲求が低次から中程度で均衡する群に、同一性達成地位が多かったと報告しており、本研究の依存L・独立L群もその同一性達成地位に属す可能性が考えられる。しかし、本研究は親への依存欲求と親からの独立欲求の高低でしか、親からの心理的離乳の過程をみていないため、依存L・独立L群に関しては、2 つ目の解釈のような親との心的葛藤以前であるのか、または以後の状態であるのかの判断は、道徳判断の段階と重要な他者への信頼感から推測するしかない。この群の場合は、道徳判断が比較的高いことから考えると、道徳判断が低次である依存H・独立L群と同じ親との心的葛藤以前の状態であるとは考えにくい。すると、親との心的葛藤を果たし、同一性も達成している状態である可能性が強まってくる。しかし、重要な他者が部活動内に

存在しない状態であるのに、なぜ道徳判断が高い値を示したのか。ここで考えられるのは、彼らの道徳判断の発達を促したのは、部活動以外の社会集団ではないかという推測である。この群のチーム内での役割は 27 人中 21 人の約 80%が非レギュラー選手であり、本研究の対象部活動は、競技成績が著しい部活動(所属しているだけで満足するような伝統校)はほとんどないため、菊池[52]の研究のように非レギュラー群に関しては、チームに対してのコミットメントが弱まっている可能性も考えられる。そのため、学校生活の他の集団や年長者、中学校時代の仲間集団や教師といったように、部活動以外の集団にコミットメントしていても不思議ではない。大学生の前半は、重要な他者が高校の時の指導者や仲間である学生が多いという五十嵐ら[32]の研究もあり、本研究が対象としていない、現在所属している部活動以外の集団に重要な他者がいる部員も多く存在するであろう。つまり、この結果からは、高校運動部員にとっての重要な他者を、現在所属している部活動以外の集団や人物を含めて調査する必要性が示唆された。しかしこのように、指導者 L・友人 L 群に限っては、依存 L・独立 L 群を、親との心理的離乳を果たし、かつ同一性まで確立している群と解釈することで、自我の発達が未成熟なままの依存 H・独立 L 群とは異なり、より自己の発達が進んだ方が、高次の道徳判断を得ることができる可能性は示唆されたことになり、仮説 1 を支持する結果となった。この発達状態に関しては、指導者は部員の部活動へのコミットメントが低いからといって、道徳判断までもが発達していないという観念を捨てなくてはならず、彼にとっての部活動以外の集団の必要性を理解することが重要である。

以上のことから、高校運動部員が親からの独立欲求が高い状態か、親への依存欲求が高い状態に、部活動内の指導者や友人といった重要な他者が道徳判断に影響を与えている可能性が示唆された。また、高校運動部員の発達段階や重要な他者に関する本研究の限界も示され、さらなる研究の必要性が示唆された。しかし、高校運動部員の道徳判断に「指導者への信頼感・友人への信頼感」の主効果がみられたことから、従来から言われていた、運動部活動における指導者や友人が部員の人格形成にまで影響を与えるという経験則を、微力ながら支持する結果が得られたのではないかと考える。

第3節　指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が道徳判断に与える影響

指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が高校運動部員の道徳判断に与える影響を検討し、仮説2を検証するために、フェイスシート上で質問した、部員が重要な他者と認知している、監督(86名)、部活の友人(71名)の各群に対し、社会的勢力の各4因子の合計得点と「親への依存欲求」、「親からの独立欲求」の各因子の合計得点、また生徒の指導者に対する信頼感尺度、青年期版対人信頼感尺度の下位尺度得点の8要因を、DP値を規定する要因とした重回帰分析を行った。

(1) 重要な他者を監督とした高校運動部員

重要な他者を監督とした高校運動部員は、「親からの独立欲求」、勢力第2因子「正当勢力」、勢力第3因子「指導意欲勢力」が道徳判断得点DP値に有意に影響を与えていた。特に、勢力第2因子「正当勢力」と勢力第3因子「指導意欲勢力」の2因子は、重要な他者を監督としている部員のDP値を上昇させるような影響をあたえていることが明らかになった。重要な他者を監督と認知している部員は、監督に対して「正当勢力」や「指導意欲勢力」を強く認知することで、より道徳判断が発達する機会を獲得しやすくなっていると考えられる。つまり、この2因子の影響が強いと言うことは、部活動内での監督との指導享受関係が適切に形成されており、監督の権威性を受け入れやすくなっている状態と言える。また、「親からの独立欲求」に関しては、重要な他者を監督と認知している部員のDP値を減少させるような影響を与えていることが明らかになった。井上[37]の研究によると、青年期を迎え、親からの心理的離乳を果たす段階である高校生は、傾倒する対象を持たないまま、過度に親からの独立欲求が強まり過ぎると、同一性拡散状態やモラトリアム状態になり、親以外の重要な他者との関係づくりが適切に行われない可能性がある。つまり、親から独立・反抗することに心的エネルギーが注がれてしまい、重要な他者との適切な関係づくりが行われず、ステレオタイプに年長者である監督の「正当勢力」などの権威性を受け入れてしまう傾向があると考えられる。道徳判断の発達を促すことができるような親以外の重要な他者との関係づくりには、親との依存欲求・独立欲求がほどほどのレベルでバランス良く保たれ、その上で監督との適切な関係が築けることが望ましいと考えられる。この結果から、重要な他者を監督と認知している高校運動部員の道徳判断には、より監督にコミットメントを促すような「正当勢力」や「指導意欲勢力」といった勢力因子が道徳判断を発達できる環境に促す要因であることが明らかになったため、仮説2の指導意欲勢力などの行動を

促進する勢力は、道徳判断に正の影響を与えるという面については支持された。しかし、本研究の結果からは、「罰勢力」が負の影響を与えるという面に関しては支持されなかった。これは、道徳判断の発達に関して、指導者からの罰や畏怖はほとんど関与していないということを示唆している。

(2) 重要な他者を部活の友人とした高校運動部員

重要な他者を部活の友人とした高校運動部員は、「友人への信頼感」と、勢力第 1 因子「専門勢力」が道徳判断得点 DP 値を上昇させるような影響を与えていた。重要な他者を友人と認知している部員は当然、部活内の友人に強く影響を受けている。重要な他者である友人達と形成している組織だからこそ、活発な意見交換が行われ、道徳判断が発達する要因である、認知的葛藤場面の機会や役割取得能力を多く得ることのできる環境になると考えられる。また、重要な他者が監督である部員とは違い、監督に対しては、「専門勢力」を認知することが DP 値に強く影響していることから、重要な他者が友人である部員は、「指導意欲勢力」や「正当勢力」といった、監督の人間性や規範といったものより、監督の持っている競技の専門性に価値を置いていると解釈できる。運動部の凝集性について研究した二宮 [97]は、部活動内の部員に傾倒する理由として、人格的に尊敬できるということや、集団を統率できるということを挙げた部員が多く、技術指導をしてくれることについてはあまり支持されないと報告しており、これは技術指導に関しては指導者に直接指導されたいと考えている結果ではないかと推測している。つまり、部活の組織運営は仲間同士で行い、指導者には競技の専門的なところを指導してもらうというスタンスこそが、道徳判断の発達を促す環境を生み出していると考えられる。この結果から、重要な他者を部活の友人とした高校運動部員は、「友人への信頼感」と、「専門勢力」が道徳判断を発達できる環境に促す要因であることが明らかになったため、仮説 2 は支持されなかった。これは、友人を重要な他者であると認知する部員特有のものである、「指導者は競技の専門的な指導を行うもの」という意識が影響していると考えられる。有意ではないものの、「指導意欲勢力」に負の影響が出ていることからも、指導者が熱心に部活動に関与することが、自分たちの仲間集団の関係を脅かすものであると感じてしまい、道徳判断を発達させる環境さえも得にくくなってしまうのだろう。また、重要な他者を監督と認知している部員同様、仮説 2 の「罰勢力」が負の影響を与えるという面に関しては支持されなかった。本研究では、罰勢力は誰を重要な他者と認知しようと、高校運動部員の道徳判断に影響を及ぼさなかった

が、賞罰が学習へ及ぼす効果を検討した研究[72]では、生徒の性格特性によって、賞罰の持つ効果は異なるという報告がされていることから、本研究で用いた概念以外の要因によって、罰勢力が道徳判断にどのような影響を与えるのかをみる必要性が示唆された。

第4節　全体的考察

高校運動部員の道徳判断の段階は、対人的規範の道徳性を持つ第3段階が最も多く、競技経験年数が多い部員やレギュラーの部員が、そうでない部員より道徳判断が高い値を示した。また、親との依存欲求が低く、独立欲求が高い群に、重要な他者の与える影響の差が見られ、指導者や友人といった重要な他者への信頼感が高い群は比較的道徳判断の段階も高かったため、仮説1は支持されたと言える。一方、仮説2は、重要な他者を監督と認知している部員においては「指導意欲勢力」が道徳判断に影響を与えていることから支持されたが、重要な他者を部活の友人と認知している部員に関しては支持されなかった。「罰勢力」に関しては、どちらにも負の影響を及ぼすという結果は得られず、支持されなかった。以上の仮説の検証から、高校運動部員の道徳判断には、対人関係発達における親との心理的離乳や、部活動内の重要な他者である指導者や友人との関係を適切に行うことの重要性、また社会的勢力との関係においては、監督と友人のどちらを重要な他者と認知しているかの違いによって、道徳判断の発達を促す社会的勢力に違いがあることが示唆された。いずれにせよ、高校運動部員にとって、部活動の指導者や友人というのは特別な存在であり、青年期の発達段階真っ直中にいる彼らの支えとなる、その名の通り重要な他者なのである。また、沢田[126]が「青年期の同輩集団が望ましいものであれば、青少年は健全に育成されることになるが、ここで問題となるのは、その集団の指導者が望ましい人格的特性をそなえたものであるか否かである。」と述べているように、青年期の彼らにとって、特に指導者が与える影響は計り知れないものなのである。

第7章　今後の課題

本研究の限界は、高校運動部員における親からの心理的離乳を「親への依存欲求」「親からの独立欲求」という2つの観点でしか見ていないという点である。今後は心理的離乳以前か以後かの選別が可能な尺度を用い測定する必要性がある。また、本研究は対象を高校運動部員に絞って行ったため、同世代の一般の生徒の対人関係発達との比較ができなかった。今後は一般の生徒も対象とし、運動部員との相違を検討していく必要があると考える。加えて、対象を中学生から大学生までに広げ、男女の差も含めて検討する必要もある。さらに、対象者の所属部活動に関して、競技が偏っていたため、今後は様々な競技で研究することも課題の一つとしてあげられる。

第8章　結論

本研究では、高校運動部員の道徳判断の発達段階を測定することで、基本的属性と道徳判断の関係を明らかにした。そして、高校運動部員の道徳判断の発達と、親との依存ー独立の葛藤から親以外の重要な他者との関係作りまでの一連の過程である対人関係発達との関連を明らかにした。また、高校運動部員の道徳判断に影響を与えると考えられる指導者の影響力を、社会的勢力の観点で捉え、指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が高校運動部員の道徳判断に与える影響を明らかにした。

結論は以下の通りである。

1. 高校運動部員の道徳判断は、対人的規範の道徳性を持つ第3段階が最も多いことが明らかになった。
2. 高校運動部員の道徳判断は、競技経験年数が上がるほど高く、またレギュラー群の方が非レギュラー群より高かったことが明らかになった。
3. 指導者への信頼感が高い群が道徳判断の値も高くなることが明らかになった。
4. 低依存・高独立群と高依存・低独立群において、指導者への信頼感が高い群が道徳判断の値も高くなることが明らかになった。
5. 重要な他者を監督と認知した高校運動部員の道徳判断には、勢力第2因子「正当勢力」と勢力第3因子「指導意欲勢力」が正の影響を、「親からの独立欲求」は負の影響を与えていることが明らかになった。
6. 重要な他者を友人と認知した高校運動部員の道徳判断には、「友人への信頼感」と勢力第1因子「専門勢力」が正の影響を与えていることが明らかになった。
7. 重要な他者として、監督や友人のどちらを認知しようと、勢力第4因子「罰勢力」は高校運動部員の道徳判断に影響を与えなかったことが明らかになった。

第9章　要約

本研究の目的は、高校運動部員の道徳判断の段階を明らかにし、基本的属性との関連を検討することであり、また高校運動部員の道徳判断の発達と、親との依存ー独立の葛藤から親以外の重要な他者との関係作りまでの一連の過程である対人関係発達との関連を検討すること、高校運動部員の道徳判断に影響を与えると考えられる指導者の持つ社会的勢力と対人関係発達が高校運動部員の道徳判断に与える影響を検討することである。

手続きは以下の通りである。本研究は研究1と研究2の2回に分けて研究した。研究1では、親との依存ー独立の葛藤、指導者への信頼感、友人への信頼感、社会的勢力それぞれの尺度が作成された。研究2では、高校運動部員294名を対象に、道徳判断の段階を検討し、研究2で作成された尺度に、DIT日本版を加えて行われた。そして、研究2で得られたデータを基に、高校運動部員の道徳判断の段階、及び基本的属性との関連、道徳判断と対人関係発達との関連を検討した。また、道徳判断に与える、対人関係発達や社会的勢力の影響も検討した。

その結果、高校運動部員の道徳判断の段階が明らかになり、基本的属性との関連が見られた。また、親への依存欲求が低く、独立欲求が高い群において、部活動内の指導者や友人といった重要な他者への信頼感が高い群の道徳判断の値が高く、仮説1は支持された。社会的勢力の影響に関しては、重要な他者を監督と認知している部員は、仮説2を支持し、重要な他者を友人とする部員は支持しなかった。「罰勢力」関しては、どちらも仮説2を支持しなかった。

これらの結果を基に考察を行い、以下の結論が得られた。

1. 高校運動部員の道徳判断は、対人的規範の道徳性を持つ第3段階が最も多いことが明らかになった。
2. 高校運動部員の道徳判断は、競技経験年数が上がるほど高く、またレギュラー群の方が非レギュラー群より高かったことが明らかになった。
3. 指導者への信頼感が高い群が道徳判断の値も高くなることが明らかになった。
4. 低依存・高独立群と高依存・低独立群において、指導者への信頼感が高い群が道徳判断の値も高くなることが明らかになった。

5. 重要な他者を監督と認知した高校運動部員の道徳判断には、勢力第 2 因子「正当勢力」と勢力第 3 因子「指導意欲勢力」が正の影響を、「親からの独立欲求」は負の影響を与えていることが明らかになった。
6. 重要な他者を友人と認知した高校運動部員の道徳判断には、「友人への信頼感」と勢力第 1 因子「専門勢力」が正の影響を与えていることが明らかになった。
7. 重要な他者として、監督や友人のどちらを認知しようと、勢力第 4 因子「罰勢力」は高校運動部員の道徳判断に影響を与えなかったことが明らかになった。

謝辞

本論文を作成するにあたり、多大なご支援と適切なご指導をいただいた中島宣行教授に深く感謝いたします。他大学から入学を希望していた私を快く迎えてくださり、また、教員を目指す私を温かく見守って下さいました。このような私が本論文を作成できたのは、先生の熱心なご指導の賜物であると確信しております。また、適切なご指導を頂き、かつ審査をして頂いた、久保田洋一教授、田中純夫准教授にも厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、大変お忙しい中、本研究の調査にご協力いただいた高校運動部活動 14 部活の指導者の方々ならびに部員の皆様に感謝申し上げます。

参考及び引用文献

1) 天貝　由美子：高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43, 364-371, (1995)

2) 天貝 由美子：信頼感の発達心理学ー思春期から老年期に至までー. 第1版, 42-77, 新曜社：東京(2001)

3) 荒木 紀幸　編：道徳教育はこうすればおもしろいーコールバーグ理論とその実践ー. 第1版, 北大路書房：京都(1988)

4) 荒木 紀幸：ジレンマ資料による道徳授業改革ーコールバーグ理論からの提案ー, 第 1 版, 明治図書：東京(1990)

5) Ausubel, D. P. : Theory and problems of adolescent development. New York:Grune & Stratton, (1954)

6) 粟田 賢三　編：岩波小辞典『哲学』. 第1版, 岩波書店：東京(1964)

7) 安積 正雄：道徳教育についての一考察ー「道徳」の時間の特設と今後の道徳教育についてー. 中京大学教養論叢, 22, (3), 699-727, (1982)

8) Beller, J. & Stoll, S. : Moral Reasoning of High School Student Athletes and General Students:An Empirical Study Versus Personal Testimony. Pediatric Exercise Science, 7, 352-363, (1995)

9) Blasi, A. : Bridging Moral Cognition and Moral Action:A Aritical Review of the Literature. Psychological Bulletin, 88, 1-45, (1980)

10) Blos, P. : 青年期の精神医学. 野沢栄司 訳, 第1版, 誠信書房：東京(1971)

11) Blumer, H. : シンボリック相互作用論:パースペクティブと方法. 後藤将之 訳, 第 1 版, 179-192, 勁草書房：東京(1991)

12) Bradford, E. & Lyddon, W. J. : Current parental attachment:Its relation to perceived psychological distress and relationship satisfaction in college students. Journal of College Student Development, 34, 256-260, (1993)

13) Bredemeier, B. & Shields, D. : Moral Growth Among Athletes and Nonathletes:A Comparative Analysis. The Journal of Genetic Psychology, 147, (1), 7-18, (1986)

14) Bredemeier, B. & Shields, D. : Applied ethics and moral reasoning in sport. In J. Rest & D. Narvaez (Eds.), Moral development in the professions:psychology and applied

ethics, Hillsdale, NJ:Erlbaum, 173-188, (1994)

15) Cartwright, D. & Zander, A. : グループダイナミックス. 三隅 二不二 訳編, 第 1 版, 誠信書房 : 東京(1983)

16) Cooper, M. L., Shaver, P. R., & Collins, N. L. :Attachment style emotion regulation, and adjustment in adolescence. Journal of Personality and Social Psychology, 74, (5), 1380-1397, (1998)

17) Erikson, E. H. : 自我同一性ーアイデンティティとライフサイクルー. 小此木 啓吾 訳編, 第 1 版, 誠信書房 : 東京(1974)

18) Evans, R. : ピアジェとの対話. 宇津木 保 訳, 第 1 版, 誠信書房 : 東京(1975)

19) French, J. R. P. & Raven, B. R. : Study in Social Power. D. Cartwright(Ed), Univ of Michigan Press, 150-167, (1959)

20) Frey, C. V. & Rothlisberger, C. : Social support in healthy adolescents. Journal of Youth and Adolescence, 25, 17-31, (1996)

21) Garnefski, N. & Diekstra, R. F. W. : Perceived social support from family, school, and peers:Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 35, 1657-1664, (1996)

22) Gilligan, C. : もうひとつの声. 生田久美子, 並木美智子 訳, 第 1 版, 川島書店 : 東京 (1986)

23) 浜名 外喜男, 天根 哲治, 木山 博文 : 教師の勢力資源とその影響に関する教師と児童の認知. 教育心理学研究, 31, 220-228, (1987)

24) Higgins, A., Power, C. F., & Kohlberg, L. : The relationship of moral atmosphere to judgements of responsibility. In Kurtunes, W. M., & Gewirtz, J. L. (eds.), Morality, moral behavior, and moral development, Willey, (1984)

25) 平野 和弘 : スポーツ部活動で何をつかむのか. 体育科教育, 40, (11), 46-48, (1992)

26) Hoffman, M. L. : 共感と道徳性の発達心理学. 菊池章夫, 二宮克美 訳, 第 1 版, 川島書店 : 東京(2001)

27) Holloingworth, L. S. : The psychology of the adolescent. New York:Appleton, (1928)

28) Holstein, E. C. : The relation of children's moral judgment level to that of their parents and to communication. In Smart, R. C., & Smart, M. S. (eds.), Readings in child

development and relationships, New York:Macmillan, (1972)
29) 福島 章：甘えと反抗の心理. 第1版, 日本経済新聞社：東京(1976)
30) 船木 祝：価値多様化の時代における道徳教育ーコールバーグ理論とその批判ー. 文化女子大学紀要・人文社会科学研究, 15, 87-102, (2007)
31) 茨城県教育長保健体育課：第 31 集 学校体育指導資料 望ましい運動部活動の在り方 改訂版. (2003)
32) 五十嵐 辰也, 杉浦 幸, 水野 基樹, 中島 宣行, 岩田 真一, 冨田 麻由美：大学生スポーツ競技者の発達におけるメンターがバーンアウトに及ぼす影響. 日本スポーツ心理学会第34回大会研究発表抄録集, 232-233, (2007)
33) 飯田 都：教師の要請が児童の学級適応感に与える影響ー児童個々の認知様式に着目してー. 教育心理学研究, 50, 367-376, (2002)
34) 今井 芳昭：親子関係における社会的勢力の基盤. 社会心理学研究, 1, 49-56, (1981)
35) 今井 芳昭：影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響の認知・影響者に対する満足度との関係. 実験社会心理学研究, 26, 163-173, (1987)
36) 井上 まり子, 高橋 恵子：小学生の対人関係の類型と適応ー絵画愛情関係テスト(PART)による検討ー. 教育心理学研究, 48, 75-84, (2000)
37) 井上 忠典：大学生における親との依存 - 独立の葛藤と自我同一性の関連について. 筑波大学心理学研究, 17, 163-173, (1995)
38) 井上 忠典：青年期における親との依存ー独立の葛藤の発達的変化. 上越教育大学研究紀要, 19, (1), 277-288, (1999)
39) 井上 忠典, 佐々木 雄二：大学生における自我同一性と分離個体化の関連について. 筑波大学心理学研究, 14, 159-169, (1992)
40) Vanden, A. Y., Biddle, S., Seiler, R., & Bakker, F. : Psycology for Physical educators. スポーツ社会心理学研究会 訳, 体育教師のための心理学, 第1版, 145-155, 大修館書店：東京(2006)
41) 市村 操一：モラトリアムとスポーツ闘争. 新体育, 48, (7), 25-29, (1978)
42) 伊藤 豊彦：コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式. 島根大学教育学部紀要, 26, 37-44, (1992)
43) 伊藤 豊彦：コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関係の再検討ーリーダーシップ PM 理論からのアプローチー. 島根大学教育学部紀要, 27, 27-35, (1993)

44) 伊藤 豊彦, 遠藤 俊郎：コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係. 島根大学教育学部紀要, 27, 37-44, (1993)

45) Josselson, R. L. : The space between us:Exploring the dimensions of human relationships. San Francisco, CA:Jossey-Bass, (1992)

46) 金原 有友梨：青年前期の心理的離乳が対人間心理的距離に及ぼす影響. 臨床教育心理学研究, 31, (1), 16, (2005)

47) 金子 周平：「重要な他者の焦点化」に関する技法と研究の比較検討ーロール・レタリング、内観療法を中心とした文献レビューからー. 九州大学心理学研究, 7, 89-96, (2006)

48) Kant, I. ：道徳形而上学原論. 篠田英雄 訳, 第1版, 岩波書店：東京(1960)

49) 加藤 厚：大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究, 31, 20-30, (1983)

50) 加藤 隆勝, 高木 秀明：青年期における独立意識の発達と自己概念の関係. 教育心理学研究, 28, 336-340, (1980)

51) Keasey, C. B. : Social participation as a factor in the moral judgement of preadolescents. Developmental Psychology, 5, 216-220, (1971)

52) 菊池 啓太：野球部における部員のコミットメントについて. 平成18年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文, (2007)

53) 金 美伶：青年期の同一性形成に影響を及ぼす重要な他者との関係性. 人間文化論叢, 9, 325-333, (2006)

54) 北川 邦一：学校の運動部活動・クラブ活動のあり方の検討ー文部省の指針・施策におけるその学校教育上の位置づけー. 大手前女子短期大学大手前栄養文化学院大手前ビジネス学院研究集録, 15, 1-26, (1995)

55) Kohlberg, L. : Stage and sequence:The cognitive developmental approach to socialization. In Goslin, D. A. (ed.), Handbook of socialization:Theory and research, Rand McNally, 347-480, (1969)

56) Kohlberg, L. : Moral stages and moralization ; The cognitive development approach. In Lickona, T., Geis, G., & Kohlberg, L (eds.), Moral development and behavior:theory, research, and social issues, New York, Holt, (1976)

57) Kohlberg, L. ：道徳性の発達と道徳教育ーコールバーグ理論の展開と実践ー. 岩佐 信道 訳, 第1版, 171-173, 広池学園出版部：千葉(1987)

58) Kohlberg, L. :道徳性の形成ー認知発達的アプローチー. 永野 重史　監訳, 第1版, 74-84, 新曜社：東京(1987)

59) Kohlberg, L. : Essays on moral development vol. 2:The psychology of moral development. Harper & Row, (1984)

60) Kohlberg, L. & Candee, D. : The relationship of moral judgment to moral action. In Kurtines, W. M., and Gewirtz, J. L. (eds.), Morality, moral behavior, and moral development, Wiley, 52-73, (1984)

61) Kohlberg, L., Levine, C., & Hewer, A. ; 道徳性発達段階ーコールバーグ理論をめぐる論争への回答ー. 片瀬一男, 高橋征仁 訳, 第1版, 7-141, 新曜社：東京(1992)

62) 小島 一夫：中学校における運動部活動が社会化に及ぼす影響と意義. つくば国際短期大学紀要, 32, 41-50, (2004)

63) 小島 美由紀：大学生の親との依存・独立の関係についてー進路選択との関連からー. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 50, 339-341, (2003)

64) 小塩 真司：SPSS と Amos による心理･調査データ解析ー因子分析･共分散構造分析までー. 第7刷, 東京図書株式会社：東京, (2007)

65) 小柳 正司, 中村 涼一：道徳性の発達と道徳教育ーコールバーグ理論を中心にー. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 5, 19-31, (1995)

66) Kroger, J. : Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status. Journal of Adolescence, 13, 65-77, (1990)

67) 隈元 泰弘：コールバーグの道徳教育思想ー文化的相対主義の克服をめざしてー. 佐野安仁, 荒木 紀幸 編, 道徳教育の視点, 晃洋書房：京都(1990)

68) 隈元 泰弘：コールバーグ理論の基底. 佐野 安仁, 吉田 謙二 編, 第1版, 92-103, 世界思想社：京都(1993)

69) Lumpkin, A. : Physical education and sport:a contemporary introduction. St. Louis, MO:Times/Mirror/Mosby/College, (1990)

70) Marcia, J. E. : Development and validation of ego identity status. Journal of Parsonality and Social Psychology, 3, 118-133, (1966)

71) 松原 敏浩：部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果ー中学校教師の視点からのアプローチー. 教育心理学研究, 38, 312-319, (1990)

72) 松田 伯彦：児童の性格・性差と言語的賞罰が学習に及ぼす効果. 千葉大学教育学部研

究紀要, 21, 15-25, (1972)
73) 松井 仁, 釜野 明子：心理的離乳の学年差. 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 94, (1996)
74) 松井 豊：友人関係の機能, 社会化の心理学ハンドブック. 斉藤 耕二, 菊池 章夫 編著, 第1版, 283-294, 川島書店：東京(1990)
75) 松尾 廣文, 荒木 紀幸：コールバーグ理論に基づく中学校道徳の授業の実証的研究. 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 589-590, (1991)
76) 三田 英二：性格特性からみた女性の自立心・依存心. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 19, 73-77, (2005)
77) 宮下 一博, 渡辺 朝子：青年期における自我同一性と友人関係. 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 107-111, (1992)
78) 文部科学省初等中等教育局長：「心のノート」について(依頼). (2002)
79) 文部科学省：学習指導要領改正. (2008) http://www.mext.go.jp/
80) 文部省：みんなでつくろう運動部. 第1版, 東洋館出版社：東京(2000)
81) 森田 啓之：運動部活動の教育的価値論の再考. スポーツ教育学研究, 20, 103-106, (2001)
82) 森 武夫：青年期の諸問題－危機理論からの展望－. 日本家族心理学会 編, 第1版, 121-144, 金子書房：東京(1989)
83) 森 恭：スポーツ指導者の社会的勢力質問紙の再検討. 新潟大学教育人間科学部紀要・人文社会科学編, 8(2), 225-230, (2005)
84) 森 恭：スポーツ指導者の選手に対する社会的勢力とストロークの関係について. 新潟大学教育人間科学部紀要・人文社会科学編, 9, (1), 127-140, (2006)
85) 森 恭, 伊藤 豊彦, 豊田 一成, 遠藤 俊郎：コーチの社会的勢力の基盤と機能. 体育学研究, 34, 305-316, (1990)
86) 村澤 和多里：ひきのばされた青年期について－現代学生とモラトリアム－. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 83, 159-186, (2001)
87) 村瀬 孝雄：思春期における自我と社会. 教育と医学, 32, 116-123, (1984)
88) 無藤 清子：「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. 教育心理学研究, 27, 178-187, (1979)
89) 永田 彰子：生涯発達的観点からみた重要な他者との関係に関する研究の動向と展望－

発達初期の重要な他者との関係が後の発達に与える影響に着目してー. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 53, (2), 401-410, (2004)

90) 内藤 俊史：Kohlberg の道徳性発達理論. 教育心理学研究, 25, (1), 60-67, (1977)

91) 中川 靖彦, 新井 肇：「生きる力」の育成と中学校における運動部活動の教育的価値の研究. 生徒指導研究, 18, 55-66, (2006)

92) 中込 四郎, 鈴木 壮：運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験(Ⅰ)ーErikson の相互性からみたスポーツ経験の特徴ー. 体育学研究, 30, (3), (1985)

93) 中井 大介, 庄司 一子：中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関係, パーソナリティ研究. 15(3), 323-334, (2007)

94) 中島 義明　編者代表：心理学事典. 第 9 版, 632-633, 有斐閣：東京(2004)

95) 中山 貴美子, 藤内 修二, 北山 秋雄：親子・友人関係が中学生の主観的健康に及ぼす影響ー思春期の子供を持つ親へのアプローチに向けてー. 小児保健研究, 56, 61-68, (1997)

96) 宗方 比佐子：道徳性心理学ー道徳教育のための心理学ー. 日本道徳性心理学研究会 編, 第 1 版, 249-262, 北大路書房：京都(1992)

97) 二宮 恒夫：運動部集団の凝集性に関する研究. 武庫川女子大学紀要, 27, 1-9, (1979)

98) 西平 直喜：青年心理学ハンドブック. 第 1 版, 3-42, 福村出版：東京(1988)

99) 西平 直喜：シリーズ人間発達 4 成人になることー成育史心理学からー. 第 1 版, 東京大学出版：東京(1990)

100) Noller, P. & Callan, J. : Adolescents' perceptions of the nature of their communication with parents. Journal of Youth and Adolescence, 19, 349-362, (1990)

101) Ogilvie, B. C. & Howe, M. : The trauma of termination from athletics. In Williams, J. M. (ed), Applied sport psychology, Mayfield Publishing. Co:California, 365-382, (1986)

102) 岡田 努, 永井 撤：文章完成法による青年期心性についての考察. 新潟大学教育学部紀要, 33, (1), 33-39, (1991)

103) 岡崎 勉：部活動顧問の指導力をどう生徒指導に生かすか. 月刊生徒指導, 27, (10), 10-13, (1997)

104) 小此木 啓吾：モラトリアム人間の時代. 第 1 版, 中央公論社：東京(1978)

105) 小此木 啓吾：モラトリアム人間の心理構造. 第 1 版, 中央公論社：東京(1979)

106)　大西 文行：Psychological Modeling に関する研究-3-道徳的判断の変容. 新潟大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 19, 157-165, (1977)

107)　大西 文行：青年心理学ハンドブック. 第1版, 448-473, 福村出版：東京(1988)

108)　大野 晃：勝利至上の高校スポーツ. 体育科教育, 43, (5), 68-69, (1995)

109)　大塚 幹太, 井筒 次郎, 時本 識資：運動部活動が道徳的認識の発達に及ぼす影響ー東京都私立T中学校を対象としてー. 日本体育学会大会号, (46), 671, (1995)

110)　落合 良行：心理的離乳に伴う人間不信とその克服. 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 281-282, (1991)

111)　落合 良行：心理的離乳への5段階過程仮説. 筑波大学心理学研究, 17, 51-59, (1995)

112)　落合 良行, 佐藤 有耕：親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44, 11-22, (1996)

113)　落合 良行, 佐藤 有耕：青年期における友達とのつきあい方の発達的変化. 教育心理学研究, 44, 55-65, (1996)

114)　小沢 一仁：親への反抗と青年期の心理的離乳ー親への反抗チャートと心理的離乳尺度との関連ー. 帝京学園短期大学研究紀要, 4, 47-55, (1991)

115)　Podd, M. H. : Ego identity status and morality: The relationship between two developmental constructs. Developmental Psychology, 6, 497-507, (1972)

116)　Power, C. F. : 道徳性心理学ー道徳教育のための心理学ー. 日本道徳性心理学研究会編, 第1版, 47-113, 北大路書房：京都(1992)

117)　Proios, M., Doganis, G., & Athanailidis, I. : Moral development and form of participation, type of sport, and sport experience. Perceptual and Motor Skills, 99, 633-642, (2004)

118)　Raven, B. H. : The comparative analysis of power preference, In Tedeschi, J. T. (ed.), Perspectives on Social Power, Chicago: Aldine, 172-198, (1974)

119)　Reimer, J., Paolitto, D. P., & Hersh, R. H. : 道徳性を発達させる授業のコツーピアジェとコールバーグの到達点ー. 荒木 紀幸 監訳, 第1版, 北大路書房：京都(2004)

120)　Rest, J. : Longitudinal study of the Defining Issues Test of moral judgement: A strategy for analyzing developmental change. Development Psychology, 11, 738-748, (1975)

121) Rest, J. : Development in judging moral issues. University of Minnesota Prass, Minneapolis, (1979)

122) Rushton, J. P. : Generosity in children: Immediate and long-term effects of modeling, preaching, and moral judgment. Journal of Personality and Social Psychology, 3, 459-466, (1975)

123) 酒井 厚：対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ. 第1版, 41-54, 川島書店：東京(2005)

124) 酒井 厚, 菅原 ますみ, 眞榮城 和美, 菅原 健介, 北村 俊則：中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. 教育心理学研究, 50, 12-22, (2002)

125) 佐藤 朗子：青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連. 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 40, 215-226, (1993)

126) 沢田 慶輔, 神保 信一：道徳教育の研究. 第1版, 国土社：東京(1967)

127) 千駄 忠至, 笹本 丈二：中学校運動部活動における生徒と教師間の信頼関係の要因. 兵庫教育大学研究紀要, 3, (21), 31-40, (2001)

128) Shields, D., & Bredemeier, B. : Character development: physical activity. Champaign, IL, Human Kinetics, (1995)

129) 須川 公央：フロイトにおける道徳性発達の論理ーエディプス・コンプレックス概念の検討を中心にー. 神奈川大学心理・教育研究論集, 26, 149-157, (2007)

130) 杉原 保史：自我同一性地位における早期完了型についてー事例に基づく考察ー. 心理臨床学研究, 5, 33-42, (1988)

131) 杉村 和美：青年期におけるアイデンティティの形成ー関係性の観点からのとらえ直しー. 発達心理学研究, 9, (1), 45-55, (1998)

132) 杉村 和美：現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達. 岡本祐子編, 第1版, 55-86, 北大路書房：京都(1999)

133) 杉村 和美：関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求ー2年間の変化とその要因ー. 発達心理学研究, 12, (2), 87-98, (2001)

134) 祐宗 省三, 原野 広太郎, 柏木 恵子, 春木 豊 編：社会的学習理論の新展開. 第1版, 金子書房：東京(1985)

135) 田口 守隆：スポーツ部活の教育的機能. 体育科教育, 43, (5), 10-16, (1995)

136) 高橋 恵子：依存性の発達的研究：Ⅰ. 教育心理学研究, 16, (1), 7-16, (1968)

137)　高橋 恵子：依存性の発達的研究：Ⅱ. 教育心理学研究, 16, (4), 26-36, (1968)

138)　高橋 恵子：依存性の発達的研究：Ⅲ. 教育心理学研究, 18, (2), 1-11, (1970)

139)　田村 幸久：学校教育活動としての運動部活動の位置づけと可能性. 日本体育学会大会号, 48, 86, (1997)

140)　田崎 敏昭：児童・生徒による教師の勢力源泉の認知. 実験社会心理学研究, 18, 129-138, (1979)

141)　田崎 敏昭：教師の勢力資源と児童のモラール. 佐賀大学教育学部研究論文集, 31, 147-163, (1984)

142)　田崎 敏昭:教師の勢力資源と生徒の逸脱傾向. 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 576-577, (1987)

143)　東京都生活文化局：大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査報告書. 第 8 回東京都子ども基本調査報告書, (1999)

144)　山田 正樹：親子相互の信頼感が高校生の自我同一性に及ぼす影響について. 佛教大学大学院紀要, 32, 237-251, (2004)

145)　山岸 明子：道徳判断の発達. 教育心理学研究, 24, (2), 29-38, (1976)

146)　山岸明子：道徳判断に関する Kohlberg の理論とその発展. 心理学評論, 20, (4), 348-368, (1977)

147)　山岸 明子:青年期における道徳判断の発達測定のための質問紙の作成とその検討. 心理学研究, 51, (2), 92-95, (1980)

148)　山岸 明子：2 種の認知的役割取得能力に関する発達的研究. 教育心理学研究, 29, (4), 47-51, (1981)

149)　山岸 明子：新・児童心理学講座－道徳性と規範意識の発達－. 大西 文行 編, 第 1 版, 53-93, 金子書房：東京(1991)

150)　山岸 明子：道徳性の発達に関する実証的・理論的研究. 第 1 版, 304-312, 風間書房：東京(1995)

151)　山岸 明子：道徳教育の発達を促す教育－＜哲学者としての子供＞と「よい子」の押しつけをめぐって－. 順天堂医療短期大学紀要, 7, 93-100, (1996)

152)　山口 満：特別活動と人間形成. 第 1 版, 学文社：東京(1990)

153)　山根 耕平：道徳教育の視点. 佐野 安仁, 荒木 紀幸 編, 第 1 版, 30-60, 晃洋書房：東京(1990)

154)　吉岡 昌紀：道徳性心理学ー道徳教育のための心理学ー. 日本道徳性心理学研究会編, 第1版, 27-46, 北大路書房：京都(1992)

Relationship between Moral Judgment of High School Athletes and Relations Development

Tatsuya Igarashi

Summary

This research has three aims. One is to reveal moral stage of high school athletes and a relationship between their moral judgment and basic attribute. The second is to reveal a relationship between their moral judgment and relations development that is a sequential process which deepen a relationship to significant others except parents after accomplish psychological weaning. The third is to reveal if relations development and coach' s social power affect on moral judgment of high school athletes. The 294 male high school athletes served as respondents. They were asked to respond to five scales: The Conflict between Independence from Parent and Dependence Scale (22 items), The Student' s Trust in Their Coaches Scale (23 items), The Interpersonal Trust for Adolescence(11 items), The Questionnaire to Measure Coaches' Social Power (26 items), and The Defining Issues Test of Japanese Version (11 items).

Major findings were as follows:

1. It becomes clear that most high school athletes are on the stage 3 of moral judgment which is called conventional moral judgment.
2. It becomes clear that moral judgment of high school athletes become as their years of competitive sport experience become longer and moral judgment of first-string is higher than moral judgment of reserve players.
3. It becomes clear that group has high score for Trust in Their Coaches has high score for moral judgment.
4. It becomes clear that who has high score for Trust in Their Coaches has high score for moral judgment in group of low Dependence / high Independence and high dependence / low Independence has.

5. It becomes clear that Legitimate Power and Enthusiasm Power has positive affect on moral judgment of high school athletes who recognize a head coach as significant others except parents. And Independence Needs from Parents had negative affect on moral judgment of high school athletes who recognize a head coach as significant others except parents.
6. It becomes clear that Trust in The Close Friend and Expert Power has positive affect on moral judgment of high school athletes who recognize their close friend as significant others except parents.
7. Even if high school athletes recognize a head coach or their close friend as significant others except parents, Punishment Power don' t have negative affect on moral judgment of them.

資料1

指導者、親、友達との関係に関するアンケート

このアンケートはみなさんの所属している部活動の監督との関係、また親、友人との関係を調査するものです。少々、理解するのが難しい質問もあるとは思いますが、あまり考えすぎず思ったままにお答え下さい。 なお、回答してして頂いた調査票、及び調査結果は、全てコンピュータによって統計的に処理されるため、個人が特定されることやプライバシーを侵害されることは一切ありません。

順天堂大学大学院　体育心理学研究室　　五十嵐辰也

論文指導教員　　中島宣行

性別:　　男　・　女　　学年:　　年

年齢:　　才　　クラブ・部活:　　

役割:　　レギュラー　・　非レギュラー　・　スタッフ　　(この半年間の間で)

ポジション／種目:　　競技経験年数:　　年

高校での競技成績:

全国大会出場　・　地方大会出場　・　県大会出場　・　地区大会出場　・　その他

今現在、あなたが最も影響を受けていると感じる人は誰ですか？ひとり選んでください。

監督　・　部長　・　コーチ　・　部活の友人　・　親　・　その他

1. あなたの所属する部活動の指導者のうち、あなたが最も影響を受けていると感じる指導者ひとりを思い浮かべ、右記から当てはまるものを1～6のひとつを選び○をつけてください。

	全くあてはまらない		あてはまらない		どちらかといえばあてはまらない		どちらかといえばあてはまる		あてはまる		とてもあてはまる
1 その指導者には意欲的に指導してもらえる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
2 その指導者はよい選手を育てたことがある。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
3 その指導者の指示に従うと自分のためになる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
4 その指導者はよいお手本になる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
5 その指導者は部員のことを本当に考えてくれる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
6 その指導者の指示に従う方が上手くいく。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
7 その指導者のようになりたい。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
8 その指導者は指導者として有名な人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
9 その指導者に従うのは当たり前だと思う。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
10 その指導者は自分より競技の経験が豊富な人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
11 その指導者の言うことを聞くのは当然である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
12 その指導者は自分より技術は優れている人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
13 その指導者はよい指導者である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
14 その指導者の指示は的確である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
15 その指導者は一緒に練習してくれる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
16 その指導者の指示にはしかたないから従うようにしている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
17 自分はその指導者を信頼している。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
18 その指導者はおもしろい人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
19 その指導者を人間的に尊敬している。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
20 その指導者は色々とやかましい。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
21 その指導者からは色々な技術を教えてもらえる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
22 自分はその指導者に信頼されている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
23 その指導者はこの競技をよく知っている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
24 自分は選手だからその指導者に従うべきである。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
25 自分はその指導者が好き。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
26 その指導者はやさしい人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
27 その指導者に反抗する勇気はない。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
28 その指導者は自分(私)のことをよく知っている人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
29 その指導者はよい成績や記録を持っている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6

30	その指導者は熱意を持って接してくれる。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
31	その指導者の言うことは正しいと思う。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
32	その指導者からの罰がこわい。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
33	その指導者は技術的に尊敬できる人。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
34	その指導者は無理矢理指示に従わせようとする。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
35	その指導者には自分の悪いところを直してもらえる。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
36	その指導者の言うことは守らなければならないと思う。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
37	その指導者はこわい人。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6
38	その指導者の技術を盗みたい。	1	―	2	―	3	―	4	―	5	―	6

2. あなたが影響を受けていると感じる指導者との関係について、右記から当てはまるものを、1～4のひとつを選び○をつけてください。

		全く そう思わない						非常に そう思う
1	その指導者は自分の機嫌で態度が変わると思う。	1	―	2	―	3	―	4
2	その指導者は自信を持って指導を行っているように感じる。	1	―	2	―	3	―	4
3	その指導者は質問したことにはきちんと答えてくれる。	1	―	2	―	3	―	4
4	その指導者は私を大事にしてくれていると感じる。	1	―	2	―	3	―	4
5	その指導者にならいつでも相談ができると感じる。	1	―	2	―	3	―	4
6	その指導者の性格には裏表があるように感じる。	1	―	2	―	3	―	4
7	私が間違っているときは、その指導者ならきちんと叱ると思う。	1	―	2	―	3	―	4
8	その指導者はいつも私のことを気にかけてくれると思う。	1	―	2	―	3	―	4
9	その指導者には教育者としての威厳があると思う。	1	―	2	―	3	―	4
10	その指導者は他の生徒と私を比べていると感じる。	1	―	2	―	3	―	4
11	私が悩んでいるとき、その指導者が私を支えてくれていると感じる。	1	―	2	―	3	―	4
12	その指導者は自分の考えを押しつけてくると思う。	1	―	2	―	3	―	4
13	その指導者は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う。	1	―	2	―	3	―	4
14	その指導者は言ってることと、やってることに矛盾があると思う。	1	―	2	―	3	―	4
15	その指導者は一度言ったことを、ころころ変えると感じる。	1	―	2	―	3	―	4
16	その指導者と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる。	1	―	2	―	3	―	4
17	その指導者には正義感が感じられる。	1	―	2	―	3	―	4
18	その指導者は威張っているように感じる。	1	―	2	―	3	―	4
19	私が失敗したとき、その指導者なら私の失敗をかばってくれると思う。	1	―	2	―	3	―	4
20	その指導者の考え方は否定的だと思う。	1	―	2	―	3	―	4
21	その指導者は何事にも一生懸命であると思う。	1	―	2	―	3	―	4
22	その指導者は正直であると思う。	1	―	2	―	3	―	4
23	将来のことがわからないときはその指導者に相談してみようという気になる。	1	―	2	―	3	―	4
24	その指導者は悪いことは悪いとはっきり言うと思う。	1	―	2	―	3	―	4
25	私はその指導者と話すと気持ちが楽になることがある。	1	―	2	―	3	―	4
26	その指導者は教師としてたくさんの知識を持っていると思う。	1	―	2	―	3	―	4
27	たとえ間違っているときでも、その指導者は自分の間違いを認めないと思う。	1	―	2	―	3	―	4

28	その指導者なら私との約束や秘密を守ってくれると思う。	1 － 2 － 3 － 4
29	その指導者は一部の人を、ひいきしていると思う。	1 － 2 － 3 － 4
30	その指導者は決まりを守ると思う。	1 － 2 － 3 － 4
31	私が不安なとき、その指導者に話を聞いてもらうと安心する。	1 － 2 － 3 － 4

3. 部活動での仲の良い友人との関係について、右記から当てはまるものを、1～4のひとつ選び○をつけてください。

		いいえ　　はい
1	仲の良い友人のことは信頼できる。	1 － 2 － 3 － 4
2	私は仲の良い友人に受け入れてもらえると思う。	1 － 2 － 3 － 4
3	私は仲の良い友人のことが大好きだ。	1 － 2 － 3 － 4
4	仲の良い友人は私と一緒にいて幸せだと思う。	1 － 2 － 3 － 4
5	仲の良い友人は私に何でも話してくれる。	1 － 2 － 3 － 4
6	私は仲の良い友人と一緒にいて幸せだ。	1 － 2 － 3 － 4
7	私は仲の良い友人が元気のないとき支えになってあげられる。	1 － 2 － 3 － 4
8	仲の良い友人にとって私は一緒ににいるだけの価値があると思う。	1 － 2 － 3 － 4
9	仲の良い友人は私が元気のないとき支えになってくれる。	1 － 2 － 3 － 4
10	仲の良い友人は誰よりも私が好きだと思う。	1 － 2 － 3 － 4
11	私は仲の良い友人には何でも話せる。	1 － 2 － 3 － 4
12	仲の良い友人は私のことを信頼していると思う。	1 － 2 － 3 － 4
13	仲の良い友人は私の気持ちがよくわかると思う。	1 － 2 － 3 － 4
14	私にとって仲の良い友人は一緒にいるだけの価値があると思う。	1 － 2 － 3 － 4

4. あなたの親との関係について、右記から当てはまるものを、1～5のひとつを選び○をつけてください。

		全く違うと思う　　全くそう思う
1	親から言われたことに、よく腹を立てたりいらいらしたりする。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
2	親に対して、つい反抗的な態度になる。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
3	自分と親の立場を尊重しつつ、必要な時にはうまく頼ったり頼られたりする。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
4	親といつまでも一緒に暮らしたい。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
5	つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
6	困っている時や、悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもいいと思う。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
7	何かする時には、親に励ましてもらいたい。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
8	親を頼らないで、自分自身の判断に責任をもって行動することができる。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
9	自分で決心できない時は、親の意見に従うようにしている。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
10	親は、私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことが時々ある。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
11	親に逆らえないで、言うとおりになってしまいやすい。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
12	悪い知らせ、悲しい知らせを受ける場合には、親に一緒にいてもらいたい。	1 － 2 － 3 － 4 － 5
13	何かに迷っている時、親に「これでいい」と聞きたいが、聞かないで自分で解決したいとも思う。	1 － 2 － 3 － 4 － 5

		全く違うと思う				全くそう思う
14	夜寝る時、時々寂しくなって、そばに親がいるだけでもいいのになあと思うことがある。	1	2	3	4	5
15	困ったときには、親に頼りたくなる。	1	2	3	4	5
16	難しい仕事をする時には、できることなら親と一緒にしたい。	1	2	3	4	5
17	何か重大な決断をしなくてはならない時にはいつでも親から助言を受ける。	1	2	3	4	5
18	親の親切な申し出を、特に理由なく、断ることがある。	1	2	3	4	5
19	ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分でも決心したい気持ちもある。	1	2	3	4	5
20	ときどき、たまらなく家出したくなる。	1	2	3	4	5
21	親に期待されていて窮屈に感じる。	1	2	3	4	5
22	小さなことでも親に相談する事が多い。	1	2	3	4	5
23	親は私をいつまでも子ども扱いにして、大人として認めてくれない。	1	2	3	4	5
24	親が「そうだ」と言ってくれると、なんとなく安心していられる。	1	2	3	4	5
25	親は自分を受け入れてくれていないと感じることもある。	1	2	3	4	5
26	困っているときや、悲しいときには、親には気持ちを分かってもらいたい。	1	2	3	4	5
27	親の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。	1	2	3	4	5
28	親は、必要以上に私の欠点をとがめる。	1	2	3	4	5
29	親には何かにつけて味方になってもらいたい。	1	2	3	4	5
30	親に対して、許せないと思っていることがある。	1	2	3	4	5
31	親といるよりも友達といるほうが楽しい。	1	2	3	4	5
32	親を失ったら、自分の生活は味気ないものになってしまうと思う。	1	2	3	4	5
33	父親（母親）のような人とは結婚したくない。	1	2	3	4	5
34	一人で決心がつきかねる時には、親の意見に従いたい。	1	2	3	4	5
35	親が私にやれということには反感をおぼえる。	1	2	3	4	5
36	親に自由を束縛されていると思う。	1	2	3	4	5

以上です。ご協力ありがとうございました。

資料2

価値判断や指導者、親、友達との関係に関するアンケート

このアンケートはみなさんがどちらを選択したら良いか迷う場面での判断の仕方や、みなさんの所属している部活動の監督との関係、また親、友人との関係を調査するものです。少々、理解するのが難しい質問もあるとは思いますが、あまり考えすぎず思ったままにお答え下さい。 なお、回答してして頂いた調査票、及び調査結果は、全てコンピュータによって統計的に処理されるため、個人が特定されることやプライバシーを侵害されることは一切ありません。

順天堂大学大学院　体育心理学研究室　　五十嵐辰也

論文指導教員　　中島宣行

性別:　　男　・　女　　学年:　　年

年齢:　　才　　クラブ・部活:　　

役割:　　レギュラー　・　非レギュラー　・　スタッフ　　(この半年間の間で)

ポジション／種目:　　競技経験年数:　　年

高校での競技成績:

全国大会出場　・　地方大会出場　・　県大会出場　・　地区大会出場　・　その他

今現在、あなたが最も影響を受けていると感じる人は誰ですか？

ひとり選んでください。

監督　・　部長　・　コーチ　・　部活の友人　・　親　・　その他

1. これからあるお話を読み、主人公はどうしたらいいかについて考えていただきます。そしてそれを考えるとき、どのようなことが重要な問題だと思うかを答えていただきます。

この質問は、あなたの物の考え方、とらえ方をみるもので、正しい答や誤った答がある問題ではありません。思ったとおりに答えてください。

Story1

Aさんの奥さんが、ガンで死にかかっています。お医者さんは、「ある薬を飲めば助かるかもしれないが、それ以上に助かる方法はない。」と言いました。その薬は、最近ある薬屋さんが発見したもので、10万円かけて作って、100万円で売っています。

Aさんは、できる限りのお金を借りて回ったのですが、50万円しか集まりませんでした。Aさんは薬屋さんに訳を話し、薬を安く売るか、又は不足分は後で払うから50万円で売ってくれるように頼みました。でも薬屋さんは、「わたしがその薬を発見しました。私はそれを売って、お金をもうけようと思っているのです。」と言って、頼みを聞きませんでした。

Aさんはとても困って、その夜、奥さんを助けるために、薬屋さんの倉庫に泥棒に入り、薬を盗みました。

＜問1＞ Aさんは薬を盗んだほうがよかったと思いますか、盗まないほうがよかったと思いますか。( )に○をつけてください。

盗んだ方がよい(　　)　わからない(　　)　盗まない方がよい(　　)

＜問2＞ 問1の問題について考えるとき、次に示すような価値判断をもって考えることは、あなたにとってどのくらい重要ですか。右記から当てはまるものを、1～5の中から選んでください。

	全く重要でない	あまり重要ではない	いくらか重要	かなり重要	非常に重要
1 我々の社会の法律が、そのことを認めるかどうか。	1	2	3	4	5
2 愛する妻のことを思ったら盗むのが自然かどうか。	1	2	3	4	5
3 Aさんは刑務所にいくような危険を冒してまで、奥さんを助ける必要があるかどうか。	1	2	3	4	5
4 Aさんが盗むのは自分のためなのか。それとも純粋に奥さんを助けるためなのか。	1	2	3	4	5
5 薬を発見した薬屋の権利は尊重されているかどうか。	1	2	3	4	5
6 Aさんは夫として、奥さんの命を救う義務があるかどうか。	1	2	3	4	5
7 我々が、他の人に対しどうふるまうかを決める時、根本となる価値は何だろうか。	1	2	3	4	5
8 金持ちを守るだけの無意味な法に守られ、薬屋は許されてしまって いいのかどうか。	1	2	3	4	5
9 この場合、法律が社会の人々の最も基本的な欲求の実現を阻止していないかどうか。	1	2	3	4	5
10 このように欲が深く、残酷な薬屋は盗まれても当然かどうか。	1	2	3	4	5
11 このような非常事態でも、盗むことが、薬を必要としている社会の他の人々の権利を侵害することにならないかどうか。	1	2	3	4	5

＜問3＞ 上の11項目の中で、あなたが重要だと思った4項目を選び、順位をつけて下さい。

1番重要(　　)　2番目に重要(　　)　3番目に重要(　　)

4番目に重要(　　)

2. あなたの所属する部活動の指導者のうち、あなたが最も影響を受けていると感じる指導者ひとりを思い浮かべ、右記から当てはまるものを1～6のひとつを選び○をつけてください。

	全くあてはまらない		あてはまらない		どちらかといえばあてはまらない		どちらかといえばあてはまる		あてはまる		とてもあてはまる
1 その指導者には自分の悪いところを直してもらえる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
2 その指導者の言うことを聞くのは当然である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
3 その指導者はよい選手を育てたことがある。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
4 その指導者の言うことは守らなければならないと思う。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
5 その指導者の指示は的確である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
6 その指導者は熱意を持って接してくれる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
7 その指導者の指示に従うと自分のためになる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
8 その指導者はこわい人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
9 その指導者はよい成績や記録を持っている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
10 その指導者からの罰がこわい。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
11 その指導者の指示に従う方が上手くいく。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
12 自分はその指導者に信頼されている。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
13 その指導者は技術的に尊敬できる人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
14 その指導者は色々とやかましい。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
15 その指導者の言うことは正しいと思う。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
16 その指導者は無理矢理指示に従わせようとする。 17 その指導者は指導者として有名な人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
18 その指導者には意欲的に指導してもらえる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
19 その指導者に従うのは当たり前だと思う。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
20 その指導者はよいお手本になる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
21 その指導者からは色々な技術を教えてもらえる。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
22 自分は選手だからその指導者に従うべきである。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
23 その指導者はよい指導者である。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
24 その指導者は自分（私）のことをよく知っている人。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
25 自分はその指導者を信頼している。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6
26 その指導者の技術を盗みたい。	1	－	2	－	3	－	4	－	5	－	6

3. あなたが影響を受けていると感じる指導者との関係について、右記から当てはまるものを、1～4のひとつを選び○をつけてください。

	全く そう思わない			非常に そう思う
1 その指導者は他の生徒と私を比べていると感じる。	1	2	3	4
2 その指導者はいつも私のことを気にかけてくれると思う。	1	2	3	4
3 その指導者は自分の機嫌で態度が変わると思う。	1	2	3	4
4 その指導者は威張っているように感じる。	1	2	3	4
5 私が不安なとき、その指導者に話を聞いてもらうと安心する。	1	2	3	4
6 その指導者は自分の考えを押しつけてくると思う。	1	2	3	4
7 その指導者は一度言ったことを、ころころ変えると感じる。	1	2	3	4
8 将来のことがわからないときはその指導者に相談してみようという気になる。	1	2	3	4
9 その指導者は何事にも一生懸命であると思う。	1	2	3	4
10 その指導者にならいつでも相談ができると感じる。	1	2	3	4
11 たとえ間違っているときでも、その指導者は自分の間違いを認めないと思う。	1	2	3	4
12 その指導者には正義感が感じられる。	1	2	3	4
13 その指導者は決まりを守ると思う。	1	2	3	4
14 私が悩んでいるとき、その指導者が私を支えてくれていると感じる。	1	2	3	4
15 その指導者は正直であると思う。	1	2	3	4
16 その指導者は言ってることと、やってることに矛盾があると思う。	1	2	3	4
17 その指導者は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う。	1	2	3	4
18 その指導者には教育者をしての威厳があると思う。	1	2	3	4
19 その指導者は指導者としてたくさんの知識を持っていると思う。	1	2	3	4
20 私はその指導者と話すと気持ちが楽になることがある。	1	2	3	4
21 その指導者は一部の人を、ひいきしていると思う。	1	2	3	4
22 その指導者と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる。	1	2	3	4
23 その指導者は私を大事にしてくれていると感じる。	1	2	3	4

4. 部活動での仲の良い友人との関係について、右記から当てはまるものを、1～4のひとつ選び○をつけてください。

	いいえ			はい
1 私は仲の良い友人には何でも話せる。	1	2	3	4
2 仲の良い友人は誰よりも私が好きだと思う。	1	2	3	4
3 仲の良い友人は私が元気のないとき支えになってくれる。	1	2	3	4
4 仲の良い友人は私に何でも話してくれる。	1	2	3	4
5 私は仲の良い友人が元気のないとき支えになってあげられる。	1	2	3	4
6 仲の良い友人は私の気持ちがよくわかると思う。	1	2	3	4
7 仲の良い友人にとって私は一緒にいるだけの価値があると思う。	1	2	3	4
8 仲の良い友人は私と一緒にいて幸せだと思う。	1	2	3	4
9 仲の良い友人は私のことを信頼していると思う。	1	2	3	4
10 私にとって仲の良い友人は一緒にいるだけの価値があると思う。	1	2	3	4
11 私は仲の良い友人に受け入れてもらえると思う。	1	2	3	4

5. あなたの親との関係について、右記から当てはまるものを、1～5のひとつを選び○をつけてください。

	全く違うと思う				全くそう思う
1 親に対して、つい反抗的な態度になる。	1	2	3	4	5
2 困ったときには、親に頼りたくなる。	1	2	3	4	5
3 親といつまでも一緒に暮らしたい。	1	2	3	4	5
4 親から言われたことに、よく腹を立てたりいらいらしたりする。	1	2	3	4	5
5 困っているときや、悲しいときには、親には気持ちを分かってもらいたい。	1	2	3	4	5
6 ときどき、たまらなく家出したくなる。	1	2	3	4	5
7 親が私にやれということには反感をおぼえる。	1	2	3	4	5
8 何かする時には、親に励ましてもらいたい。	1	2	3	4	5
9 親は、必要以上に私の欠点をとがめる。	1	2	3	4	5
10 一人で決心がつきかねる時には、親の意見に従いたい。	1	2	3	4	5
11 親は自分を受け入れてくれていないと感じることもある。	1	2	3	4	5
12 親には何かにつけて味方になってもらいたい。	1	2	3	4	5
13 つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	1	2	3	4	5
14 親の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。	1	2	3	4	5
15 親に対して、許せないと思っていることがある。	1	2	3	4	5
16 小さなことでも親に相談する事が多い。	1	2	3	4	5
17 親は私をいつまでも子ども扱いにして、大人として認めてくれない。	1	2	3	4	5
18 親が「そうだ」と言ってくれると、なんとなく安心していられる。	1	2	3	4	5
19 何か重大な決断をしなくてはならない時にはいつでも親から助言を受ける。	1	2	3	4	5
20 親の親切な申し出を、特に理由なく、断ることがある。	1	2	3	4	5
21 悪い知らせ、悲しい知らせを受ける場合には、親に一緒にいてもらいたい。	1	2	3	4	5
22 自分で決心できない時は、親の意見に従うようにしている。	1	2	3	4	5

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。